

国道151号線改良工事に伴なう埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書

# 門原白須遺跡

1985. 3

長野県飯田建設事務所  
長野県下伊那郡阿南町教育委員会

60 教号 外  
昭和60年5月

信人文学部 殿

阿南町教育委員会

発掘調査報告書の贈呈について

日頃、阿南町の文化財保護につきましては、一方ならぬご配意を賜り厚くお礼申し上げます。

このたび、国道151号線の改良工事に伴い門原白須遺跡の発掘調査が行われ、関係各位のご指導とご協力により、下記の発掘調査報告書を刊行しましたので贈呈いたします。

ご高覧をいただき、広くご活用されますようおねがい申し上げます。

記

国道151号線改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

(門原白須遺跡)

国道151号線改良工事に伴なう埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書

# 門原白須遺跡

1985. 3

長野県飯田建設事務所  
長野県下伊那郡阿南町教育委員会

## 序文

阿南町富草地籍は、古墳も多く各所に埋蔵文化財包蔵地があることは古くから知られていましたが、考古学的調査は余り進んでいませんでした。近年の表面分布調査によりまして多くの新発見遺跡や、周知遺跡規模の明確化が進んでおります。

昭和53年頃から始まりました国道151号線改良工事は、急崖地形の掘削が多く該当遺跡は少なくありませんが、栗野・鶯巣・門原地籍では該当する遺跡が予想されていました。果せるかな門原遺跡（墓地屋峠）に隣接する白須地籍の小台地から、縄文時代中・後期の土器片と中近世の陶器片が発見されました。そのため、県教育委員会と県の飯田建設事務所へ保護協議をお願いしまして、試掘調査の実施を決めていただきました。

門原遺跡（墓地屋峠）に隣接する所であります、国道改修工事に関する新発見の遺跡として取り扱う必要があるため、「白須遺跡」と命名し当委員会の名において遺跡発見届を提出しました。遺跡の規模不詳のため、試掘による発掘調査を実施し、遺構等の発見が多かったら改めて本格調査をする契約を結ぶ事にいたしました。当委員会としては調査機能を持っておらず発掘調査の遂行に苦慮しておりましたが、幸い今村団長の協力を得て予期以上の成果を挙げることができました。

調査の成果は報告文にありますように、小台地に縄文時代中・後期の住居址が7軒発見され、時期差、重複等から勘案して何時期かに亘る小集落の存在が実証されています。元来富草地区での発掘調査の嚆矢とするものであり、住居址の発見は最初であります。勿論集落の確認も最初であります、当地域小台地における遺跡立地を究明のために果す役割は大きいと自負しています。

調査報告書刊行に当たりまして、この調査の実施に深いご理解とご指導をいただきました飯田建設事務所、県教委文化課、困難の多かった発掘調査を遂行してくださった調査団各位、調査進行に何かとご協力を賜った周辺の方々に対しまして深甚な謝意を表します。

昭和60年3月

長野県下伊那郡阿南町教育委員会教育長 佐々木忠次

## 目 次

### 序 文 例 言

阿南教育会委員長 佐々木忠次

I 調査の経過	1
1 白須遺跡の保護協議と発掘調査	1
2 調査団組織	2
II 富草地区の環境	3
1 富草の概観	3
2 富草の遺跡分布	4
III 調査の結果	9
1 白須遺跡の位置	9
2 調査区の設定	11
3 遺構と遺物	11
(1) 遺構の概要	11
(2) 1号住居址	11
(3) 2号住居址	14
(4) 3号住居址	16
(5) 4号住居址	16
(6) 5号住居址	17
(7) 6・7号住居址	19
(8) 縄文時代の土坑	20
(9) 石列1・2・3	22
(10) 溝状遺構1・2	22
(11) 暗渠排水溝跡	22
(12) 其の他の遺物	22
4 調査のまとめ	23
(表目次)	
表 1 富草遺跡一覧	7
表 2 富草古墳、城跡一覧	7
(挿図目次)	
第1図 富草地区遺跡分布図	8

第2図	白須遺跡位署図	10
第3図	白須遺跡遺構全体図と1号住居址	12
第4図	2号・3号住居址	15
第5図	4・5・6・7号住居址	18
第6図	6・7号住居址土層断面	19
第7図	石列1. 土括1~8	21
第8図	1号住居址出土土器	25
第9図	1号住居址出土土器	26
第10図	1号住居址、7号土括出土土器	27
第11図	2号住居址出土土器	28
第12図	2号住居址出土土器	29
第13図	2号住居址、1号土括、4号住居址出土土器	30
第14図	5・6号住居址出土土器	31
第15図	3・6号住居址、溝状遺構出土土器	32
第16図	1号住居址出土石器	33
第17図	2・4号住居址出土石器	34
第18図	5・6号住居址出土石器 石列1 近世陶器	35
(図版目次)		
図版1	白須遺跡遠景	37
図版2	1号住居址	38
図版3	1号住居址、埋甕、遺物	39
図版4	2号住居址全景	40
図版5	2号住居址、3号住居址	41
図版6	4号住居址全景	42
図版7	4号住居址、炉と遺物	43
図版8	5号住居址	44
図版9	6・7号住居址全景と石圓炉	45
図版10	6号住居址出土遺物	46
図版11	土括1~4	47
図版12	土括5~8、溝状遺構	48
図版13	石列1.2.3と出土陶器	49
図版14	1号住居址石圓炉の復原	50
図版15	調査団と作業風景	51

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和59年度に飯田建設事務所と阿南町長との委託契約に基づいた国道151号線、富草門原地籍改良工事に伴う白須遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の委託契約の期間も限られているので、調査結果の事実報告を中心にして、考察論考にまで及んでいない。
3. 本書の資料作成に当たり、現場の計測・記録図は、林敏・今村俱栄の協力を得て今村が担当し、写真撮影も今村が当っている。  
遺物整理・拓本取りは林敏・今村俱栄が、遺物計測は今村が担当している。
4. 報文執筆はすべて今村である。
5. 出土遺物・測量原図等関係資料は一括して阿南町教育委員会事務局が保管している。

# I 調査の経過

## 1. 白須遺跡の保護協議と発掘調査

国道151号線改良工事が富草門原地籍へ進んで来ると聞いて、松村全二が門原地籍の路線予定地の分布調査を進めたのは昭和54年頃であった。その頃は、計画路線が確定しない事もあって、路線確定次第飯田建設事務所と現地調査の計画があったが、実現しないまま日が経過した。

昭和58年1月、今村・松村が白須地籍の国道改修予定地を訪れた所、用地内の野菜畠から縄文時代中・後・晩期の土器片、石器、中近世陶器片の発見を見たので、直ちに教育委員会に通報した。同12月、県教委小林指導主事による現地協議が行われたが、現国道に面する門原遺跡（墓地屋峰）と判断され、協議対象区域から除外された。この事は、阿南町教委にある遺跡分布図が旧來のままであったのと、現地協議に地元研究者の立合いがなかった事に起因するもので、埋文担当者の居ない市町村教育委員会の対応と、県教委の市町村教委への指導のあり方が問われる一面もあった。

昭和59年度になって工事は進行するのに調査が進まないので再度依頼し、現地協議が行われたのが8月3日の事であった。県建設事務所中沢主査、県教委文化課小林・太田指導主事、阿南町建設課長、阿南町教委教育長・係長と今村による協議であった。工事発注を9月に控えた時期でもあり、新発見の遺跡であることから、200m<sup>2</sup> 10日間ほどの試掘調査を実施し、その結果如何によっては本格調査の再協議をすることに決定した。なおこの折に、新発見遺跡として登録し、「白須遺跡」と命名された。

その後、建設事務所と阿南町長、阿南町長と調査団長との委託契約が結ばれ、試掘調査が開始されたのは8月25日である。試掘調査は2図位置図にあるようA～Dにかけて路線に平行してグリッドを設定し、Aから開始し、Aから1号住、Bから2・3号住、Dから4号住、Eでは6・7号住が、夫々土堤の先端にかけて発見され、その他に土壌7～8、石列3、溝状遺構2等が確認され、4・6号住居址はか溝、石列の検出をすませて9月8日に13日間の日程を終了している。直ちに試掘調査の結果報告と共に検出調査の再協議を申請した。9月13日、県教委文化課小林・太田指導主事を迎えて現地協議の結果、作業員7名により15日間ほどの本格調査が決定した。

検出調査は9月17日から同29日にかけて実施している。2号住、3号住の検出作業から始めている。当初は3軒ほどの切り合いが予想されたが、住居址は2号住が3号住居址を切っているだけで、2号住は径6.5mと大きく、壁高は95cmと深かった。しかも中間層から振り込まれた大形土壌1が中央にあり、累石も多く西壁沿いに深い整穴1さえあって検出に期間を要している。9月21日から1号住居址、10月1日から4号住居址の検出作業を進め、土壌、石列、5号住、7号住の検出を並行して10月11日に現地作業を終了している。

調査の結果にある様に、縄文時代中期住居址 6軒（1, 2, 3, 5, 6, 7号住）同時代後期住居址 1軒が検出され、縄文時代土壤 5、時期不詳土壤 3、時期不詳の溝状遺構 2、近世所産と思われる石列 2。自然累積かとも思われる石列、近代所産と思われる暗渠排水溝等数多くの遺構が検出されている。住居址も重複、切り合いも多く、合わせて近世以降の水田造成工事によって地形変容も著しく、階段状水田の土堤によって北端が削り取られて満足な原形を止めた住居址は 1軒もない状態であった。不幸中の幸いであったことは夫々の住居址が土堤の先端部に位置することで、若しこの位置が數メートル上下すれば水田造成によって消滅したであろうことである。

縄文時代中・後期の土器のほか、縄文時代晚期の土器少量、平安時代灰釉陶器片、近世陶器片等も出土しており、用地外に地時期の遺構の存在も暗示されている。

現地の発掘調査のあと、10月11日、18日に小林好治、勝野竜夫両氏の案内を受けて、白須遺跡に近い聖塚、門原のお宮付近、才の神の石棒と双体道祖神、鷲巣の旧道と旧道沿いの石佛群、鷲巣賀美の縄文時代の土器と弥生時代の小形土器、宮の原の表探調査、栗野中根地籍、中イナバの土師、須恵、灰釉陶器片の調査、天宝林古墳等の現地調査を実施している。

整理作業は、9月9日～16日、9月30日～10月11日、10月13日～10月25日、1月7日～2月10日にかけて実施し、本報告書を完成している。

## 2. 調査団組織

### (1) 阿南町教育委員会事務局

教育長 佐々木 忠次  
社会教育係長 玉置 正

### (2) 調査団

調査団長 今村 善興 (長野県文化財保護指導委員 日本考古学協会員)

調査補助員 林 敏 今村 俱栄

協力作業員 (順序不同)

勝野竜夫	伊藤徳逸	松下知直	熊谷武男
小林好治	万木正男	玉置博光	佐々木 幸
小林正男	小沢きくゑ	佐々木おとゑ	佐々木はる
今村春一	向田一雄		

## II 富草地区の環境

### 1. 富草の概観

阿南町は、旧富草村・大下条村・和合村・旦開村の4か村が昭和32~34年に合併してできた町である。富草村は江戸時代は、靈雀沢・古城・栗野・新木田・鶯巣・浅野・門原村の7か村が小笠原領、大崎・恩沢・大平・梅田・鶴目・鳥原の6か村が近藤領で多くの村に分かれていた。明治8年に新しい村・富草村が生まれた。旧村は大崎・恩沢・大平・鶴目・梅田・古城・靈雀沢・栗野・新木田・鶯巣・浅野・川田。下梅田の13か村で「トミ」であり、稻作の豊かさを願って村名がつけられたと言う。その後連合村の変遷を経て合併まで続いている。

富草地区は、北は下条村、西は下条山脈の南端庄田山、八尺山をはさんで和合の山地・南は井戸入沢・門原川に面する辺りを境として大下条、東は天竜川の深い峡谷をはさんで泰阜村の左京、明島、門島に接している。西の庄田山(965.9m)、八尺山(1218.5m)の支脈が屏風の様にそり立ち、そこから流れ出る川は、北から南の沢川、大沢川、沢尻川、門原川、井戸入沢があって、その支流も数多く、夫々が深い浸食谷を形成している。国道151号線が南北走する辺りに大きな断層があり、そこから西高東低の尾根状台地がいくつも東北走し、やがて天竜川へ急に落ち込む地形を示している。この傾向は北の下条村でも一見似かよった様相も見られるが、台地の広さ景観は南の沢川を越えると大きな差異が見られる。富草の中の台地と言っても、栗野の台地を除けば、山あり、谷あり、小河川ありで起伏の多い複雑な所である。南北に走る道路は国道151号線を除けば数は非常に少なくつづら折れの上り下りの多い道路ばかりで、地形が大きく通行の妨げになっている。これは富草・大下条を中心とした第三紀中新世の地層が広く分布しており、この地層は比較的軟かい岩石から構成されているため崩れ易く、河川に浸食され易く深い谷が多い。

この第三紀層は富草層群と呼ばれる地層で、化石を多く含む地層で知られている。層序表によれば、和知野層(最下層)、御供・中谷地区的温田層、深見・早畠田・門原を中心とした大下条層・鶴目・門原・浅野・栗野・靈雀沢・菅野へ続く新木田層、栗野の山麓に多い栗野層等によって構成されている。沖積層は栗野、学校下方と上梅田に一部、洪積層は下梅田と下条合原に見えるだけである。基盤岩類は国道151号線の西側山地帯と大沢川右岸山地、門原川中下流の両岸の高台に多い。富草・大下条地区を歩いて見ると各所に第三紀層の露頭が見られ、凝灰岩塊が地表面に露出する小台地が多く、地形的に見ると遺跡立地の良さそうな所であっても、凝灰岩塊の露出する所では、古い時代の遺物は殆んど発見することができなかった。

現在の生活舞台の中心は、標高400~550m位の所で、いずれもが第三紀層の岩石の風化によって生じた土壤であって、肥沃で水田耕作に適し反当収量の多い地域である。各所に東走する台地

上や、南面する傾斜地は、肥沃かつ気候温暖な所で人々の生活に適した所である。この様な起伏の多い地形の複雑な所ではあるが、土質や気候に恵まれた所でもあること、又先進文化のすぐれた東海地方に近い阿南地域の一画であるため、古代文化の栄えた地方と考えられるが、国道151号線の改修も遅れ、主要道路の改良も十分とは言い難いので、近代産業の発展し難い開発の遅れた後進的な地域の一つである。下条を通って栗野までは国道151号線の改良工事が進展した現今、地域様相が大きく変容しつつある。

## 2. 富草の遺跡分布（図1）

複雑な地形と相俟って地質研究を除いては地域調査は遅れがちで、考古学の調査はごく一部の地域を除いては、飯田盆地周辺に比べると後進地域の一つであった。古くは大正頃から地区内各地籍から土器・石器が発見され、遺物散在地も多く登録され現在古墳7基、遺物散在地24か所、城跡1である。埋文包蔵地が多い割合に、発見された遺物が散逸したり、紛失等もかなりあって実態がなかなか把握し難い地域の一つである。別表1の遺跡一覧でもわかる様に、或る特定の時期に○印のつくだけの遺跡が多い。昭和55年頃から実施された町史編纂資料集成の地区内分布調査の結果、石器・土器の出土も多い事がわかりつつある。しかし、地形の複雑さは分布調査には障害が多く、全地域訪かれかねるのが現状で、尚且つ未解明の地域が多いのが現状である。今回の地域調査によって確認された鷲巣伊藤久司さんが拾収保管されている「こんたひら」遺跡の縄文時代の中期中葉・後葉の土器石器、同期晚期、弥生時代後期の土器片や、栗野中畠和泉治さん宅にある「マトバ」地籍出土の奈良・平安期の土師・須恵器、平安灰釉陶器、中世山茶椀、天目椀、瀬戸灰釉陶器片の大量出土等、調査が進めば進む程有力遺跡が存在することを物語ついている。学術調査にしても緊急発掘調査例も今まで皆無で、今回の白須遺跡の発掘調査を嚆矢とするわけで、今後に期待される地域である。

遺跡の分布状況を見ると、東北方向に伸びる栗野の尾根状台地と、国道151号線添いの小台地に多いことがわかるが、詳細分布調査が進めばこの様相は変容するかも知れない。古墳の7基は標高500m前後の台地の先端部、山麓部、山頂等に位置していることは大下条の場合と同様で、天宝林古墳(7)、京の塚古墳(21)を除くと古墳の両面又は前面に細長く続く低湿地を臨む位置に立地しているのも大下条とよく似かよっている。京の塚は中世信仰塚かも知れないと言われば鷲巣の国道151号線東側にある独立丘の頂にある。墳丘の態をなさないが、白須遺跡の南端、国道上のカーブに「聖塚」の碑があるが、原位置は国道下の急傾斜地に封土があったと伝えられるもので、中世信仰塚の一つとも考えられる。

時代別の遺跡を見ると概略次の様になる。その位置、遺跡名は遺跡図、遺跡一覧表によるが、主な遺跡とわかる範囲の特長をあげると次の様である。

### (1) 繩文時代の遺跡

13の埋文包蔵地の中、11遺跡が繩文時代の遺跡としてあるが、中には時期判定の難しい土器片や石器の出土によって判断したものもある。栗野稻葉遺跡(12)は台地上にあって繩文前期、中期の土器が出土し、石臼炉の発見が伝えられている。今回の調査で晩期の土器片が見つかっている。栗野の宮の原遺跡(17)は台地面上は広く、富草中最有力遺跡の一つである。遺物分布の特に多い所は、富草察周辺である。表面から繩文時代中期・後期の土器片が多く拾える所詳細調査をしたい所である。新しい国道はこの台地の先端部を横切ることになっているので、その調査に期待が持たれるが、遺跡の中心は上方と考えられる。鷺巣「こんたひら」遺跡(20)は、山麓高い所に位置し、伊藤久司さんの話によると、石臼炉があったことが伺われる。耕作中発見された数多くの土器や石器が保存されていて、今回阿南町化石館へ寄贈された。この中には繩文時代中期勝板式、加曾利E式土器片のほかに、後期称名寺式、晩期の条痕文土器も含まれていて、有力遺跡の様相を示している。後項で触れるように弥生式土器も出土している。「墓地屋崎」遺跡(23)は從来門原遺跡と呼ばれたもので、現国道から観音堂にかけての一帯とされていた。表面で遺物が多く拾えるのは国道の切取面とその東に続く傾斜面である。国道の西は水田地帯で遺物は拾えない。ここでの遺物は繩文時代前期の薄手の土器と加曾利Eの土器片が多い。白須遺跡(S)については本文にある通りであるが、同一の遺跡かも知れない。

### (2) 弥生時代の遺跡

阿南地方は稻作文化を伝える繩文時代晩期や弥生時代の古い土器の出土地の多い阿南地方の中で、富草では今の所、繩文時代晩期の遺跡3、弥生時代後期の遺跡2と少ない。ちなみに大下条では晩期5、弥生時代は6である。富草の場合、今回の調査によって確認されたのは鷺巣のこんたひら、白須遺跡であることから今後この数は増加するものと思われる。

鷺巣のこんたひらから出土した小形土器は、文様の点で弥生時代後期座光寺原式と比定されよう。収集された土器の中に座光寺原式のものがあることから、弥生時代の有力な遺跡と考えられる。宮の原遺跡(17)からは後期中島式土器片が出ている。

### (3) 古墳時代の遺跡

7基の古墳については前述のとおりである。古墳時代の遺物出土地は6遺跡でその内、古墳の遺物出土と思われるものを除くと、栗野中ツルネ(120)、栗野中稻葉(12)、鶴目向山遺跡(26)である。中ツルネ遺跡は今回の調査で土師器片を採集、中稻葉遺跡は以前に耕作中に発見された土師器の高杯、壺が富草化石館に保管されている。土地所有者の和泉さんの話によると、1m程地下に焼石と炭があり、その辺りからこの土器が発見されたと言う。かまどがあったものと推測さ

れる。

#### (4) 奈良・平安時代の遺跡

奈良時代・平安時代の遺物の判断は器形のわかるものでないとできないので、この場合は主として平安時代に限られる。平安時代の遺物出土地も從来その数は少なかった。例えば大下条では3遺跡であったものが、分布調査のあと11遺跡に、下条村でも2遺跡であったものが、5遺跡に増加している。富草では現在4遺跡を数えるが、門原原開土(83)は昭和55年に、栗野稻葉遺跡(マトバ、12)と白須遺跡(118)は今回確認されたもので、この例から見れば更に増加するであろう。稻葉遺跡マトバ地籍は、栗野門島停車場線添い新木田へ通ずる道路北にあって、沢尻川の低湿地に接する最下段である。和泉治氏が水田を削って果樹園を造成する時広範囲に亘って多くの土器片が出土し、各所に焼け土があったと言う。収集された土器片は非常に多く、奈良・平成期の甕、高环、坏、蓋坏、平安灰釉の長頸瓶、坏、土師器甕、中世の山茶碗、天目碗、瀬戸灰釉陶器等で、今の所これだけの量の遺物が出土する所は、阿南町では大下条早稻田遺跡に匹敵する重要遺跡と想定される。

#### (5) 中世の遺跡

平安時代から中世にかけては、下条に大山田神社、大下条に早世田神社が祀られ、大下条早稻田に閑氏が、富草古城に下条氏が拠を構え、下条氏は後に吉岡城に本拠を置いて阿南地方を支配した歴史の残る所であるから、それに関連する遺跡は多い筈である。それに反して中世遺物出土地の調査は余り進んでいなかったのが実情である。大下条、富草地区を調査すれば、その度に新遺跡が増加し、飯伊地方の中世遺跡の濃密地域の一つであろう。

栗野稻葉遺跡(マトバ地籍)については前項で触れた。古城遺跡から多くの中世陶器が出土している。古城城跡の一つの曲輪に当る佐々木氏の野菜畠から、建物の柱台石の配列と共に天目茶碗、小皿、茶碗、鉢、皿、摺鉢、石臼、等が多量に出土したことが報告されている。その他の遺跡も7遺跡程数えられるが、表面から数片の陶器片を採集した程度の所ではあるが、今後の調査によってはっきりさせていきたい所である。城跡にても古城城跡に止っているが、これは本拠の城跡であって、それに関連する砦や焼火台も數多くあったに違いない。吉岡城に本拠が移れば尚更のこと、富草地区は重要地域の一つであって居館もあったに違いない。古社寺跡も聞いているので、これらも含めて解明を深めたい地域と思っている。

表1 富草地区遺跡一覧

町番号	遺跡名	所在地	先史期	縄文時代				弥生時代			古墳時代		平安時代		中世	近世	備考
				草創	早	中	後	前	中	後	土器	須恵器	土器	須恵器			
1	東山 富草 大島				○												
2	野当 × 新木田 野当				○												
3	樺林 × 下庭田 樺林				○												
4	東 × ×				○												
6	2999 上栗田 × 上栗田				○					○				○	勾玉、切子玉		
11	2999 佐所根 × 風野				○					○ ○							
12	樺葉 × ×			○ ○	○				○ ○ ○ ○ ○ ○					○	中イナバ ハマイバ		
13	日向平 × ×			○					○								
120	中根 × ×			○					○				○	○ ○			
14	2988 かさつが × 薩道沢			○										○			
22	古城 × 古城				○									○			
15	2991 伊田 × 風野			○											石碑		
16	羽根本 × ×			○										○			
17	2995 宮の原 × ×			○ ○				○		○			○	○ ○			
18	葉の平 × 風葉			○													
19	樺越 × ×			○										○			
20	こんひら × ×			○ ○ ○				○									
22	2997 電塚 × 門葉			○										○	門塚 寸の神、石碑		
23	2998 基地越峰 × ×			○ ○										○	石碑		
118	白須 × ×				○ ○ ○								○ ○ ○ ○ ○ ○				
83	原猪土 × ×			○ ○									○ ○ ○ ○ ○ ○				
25	上栗田 × 鶴日			○					○				○ ○				
26	3001 向山 × ×									○							

表2 古墳城跡一覧

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構	遺物	備考
5	3000 上垣外古墳	富草・上垣外 8692	山腹	(古) 円 横 直刀 1, 鋒先 2, 鉄釘 1, 勾玉、切子玉、土解器、須恵器		城
7	2992 天宝林 ×	× 風野・天宝林 2905の1	×	(古) 円 (径 16.41, 高 3.2), 橫 (長 5.6, 巾 2.0, 高 2.0) 鉄釘、鍔		
8	2993 堂保 ×	× × 2907	×	(古) 円 (径 10.8, 高 1.9), 橫 直刀 2, 須恵器		大平正郎
9	2994 東山 ×	× × 2909の2	×	(古) 円 (径 15.1, 高 3.7)		
10	2990 佐所根古墳	× × 葉野 2798	丘陵	(古) 円 直刀 3, 土解器, 須恵器		
21	京の堀 ×	× 鶴巣	×	(古) 円		経塙?
24	3002 上栗田 ×	× 鶴日	山腹	(古) 円 (径 10.18, 高 4.93), 橫 直刀		
27	古城城跡 ×	古城	丘陵	木圭輪, 1, 2 の曲輪, 中世陶器		

1図 富草地区遺跡分布図



1:25,000

37

### III 調査の結果

#### 1. 白須遺跡の位置

白須遺跡は、下伊那郡阿南町富草門原の南端にある。下条山脈の東南端八尺山（1218.5m）の東麓、弁当山の北山麓に続く支脈麓に鉄まれた位置にある。八尺山を源流とする門原川と弁当山を源流とする井戸入沢の間に門原の尾根状台地が続き、この台地全体が門原部落である。尾根状台地とは言っても一連の台地ではなく、起伏の多い尾根状台地の集合地形である。栗野から鷲巣を通り門原へ抜ける現国道は曲折の多く、起伏の多い道路で、栗野から雲雀沢間の旧国道と共に最大の難所になっている。門原川の大カーブを過ぎた所から庄ノ沢右岸台地は広く、才の神と呼ばれる旧道沿いの石仏群があつたり門原の産土神がある。その南には二連の尾根が並び、その南は、井戸入沢へ急崖で面する白須・墓地屋峰の尾根状台地である。国道は門原部落を南走して、この二つの台地の鞍部を掘り割って西に向きて井戸入沢を上流で渡って、大下条小中尾へ通じている。浅く掘り割って僅かに上り下りする所が墓地屋峰で、その東が墓地屋峰遺跡、西方上方が白須遺跡である。

白須遺跡は井戸入沢左岸に南東面する細長い扇状台地で、南は急崖、西北は尾根状台地麓の低湿地にはさまれ、東西50m、南北200mに及ぶ範囲が遺跡と推定される。2図白須遺跡位置図中のⒶ～Ⓓが調査対象範囲である。

墓地屋峰の東端、聖塚北側から金山社前を旧道が通り、井戸入沢上流で渡河し大下条小中尾へ出て田上・早稲田へ通ずるコースと、小中尾から和合へ行く道筋があって、江戸時代の主要街道は、白須地籍を東西に縱断していたと言う。

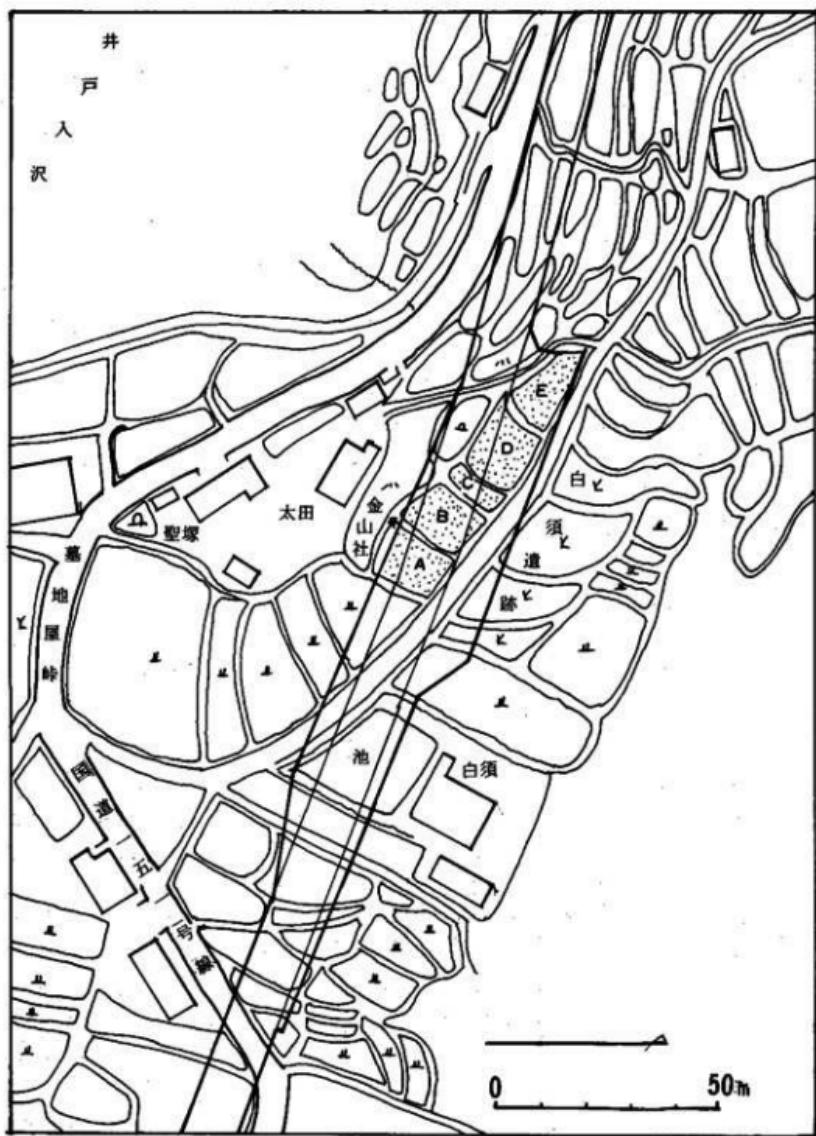
夫々の古字の位置、由緒はさだかでないが、この一帯には、白須・大開外・神田・大田・空のかいと・せついん・そまんたわ・さがり・田の口・井の口等興味深い地名が残されている。



写1 遺跡遠望 (東から)

観音堂から白須遺跡を望む 左側急崖下が井戸入沢

2図 白須遺跡位置図 (1:1,000)



## 2. 調査区の設定

2図位置図Aの畠と下の水田にあるNo 215-10と、CにあるNo 216-70を結んで10列とし、左右に数列を決め、東西方向にA～Yのグリッドを設定した。調査の結果、Aの畠に1号、Bの畠に2・3号、Cの畠に4・5号、Dの畠に6・7号住居址が発見されている。

## 3. 遺構と遺物

### (1) 遺構の概要 (3図)

段々に造成された畠A～Dにかけて夫々縄文時代の住居址や土壤、石列、溝状遺構が検出されている。Aでは1号住居址(縄文中期後葉)と近世石列1、土壤5・6・7と時期不詳の石列3が検出され、西側に二条の近代の暗渠排水が構築されている。Bの畠では2・3号住居址(縄文中期後葉)と土壤1・2・3、時期不詳の溝状遺構と堅穴1があった。Cの畠では5号住居址(縄文中期後葉)、4号住居址(縄文後期)と近世遺構と思われる石列を検出している。Dの畠からは重複して構築された6・7号住居址(縄文中期中葉)と溝状遺構1があった。この上段Eの畠では遺構の発見はなかった。発見された遺構を時期的にまとめると次の通りである。

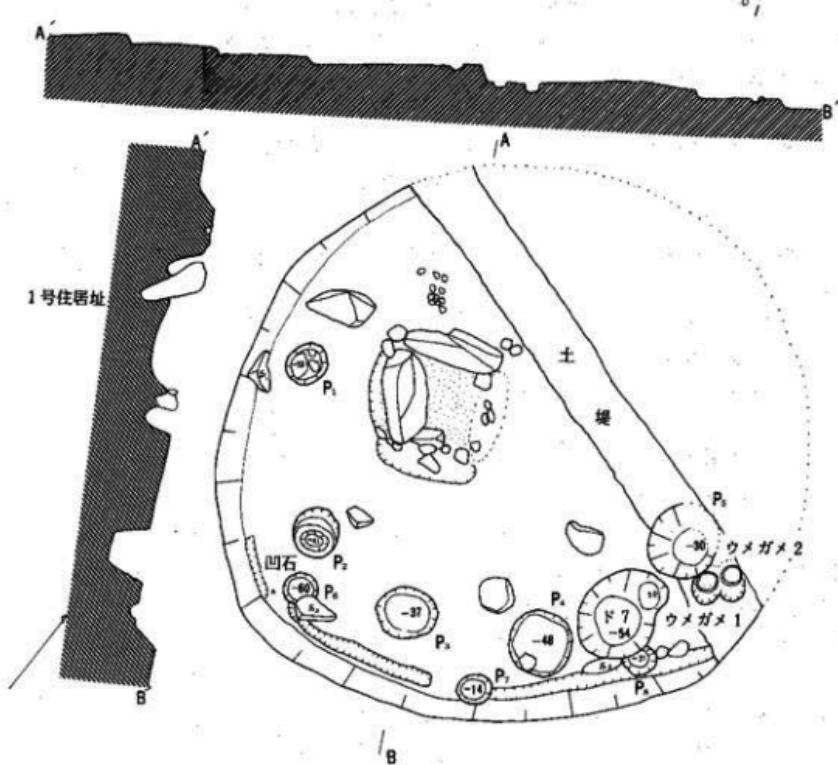
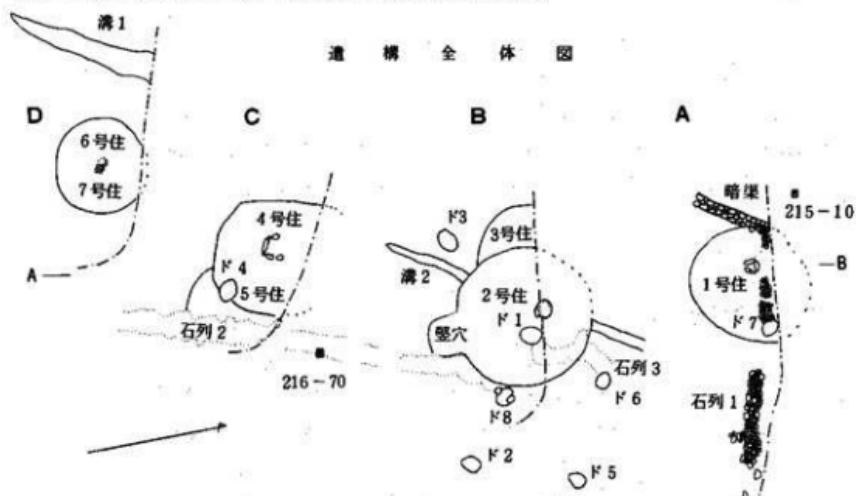
① 縄文時代中期中葉住居址	2	(6・7号住居址)
② 縄文時代中期後葉住居址	4	(1・2・3・5号住居址)
③ 縄文時代後期住居址	1	(4号住居址)
④ 縄文時代中期堅穴	1	(堅穴1)
⑤ 縄文時代中期後葉土壤	5	(1・2・4・7・8土壤)
⑥ 時期不詳土壤	3	(3・5・6号土壤)
⑦ 時期不詳溝状遺構	2	(溝1・2)
⑧ 近世以降 石列	3	(石列1・2・3)
⑨ 暗渠排水溝	2	

### (2) 1号住居址

#### ① 遺構 (3図、図版2・14)

1号住居址はAの畠の北端にあり、土地造成の土堤によって3分の1が削りとられている。住居址のプランは不整円形で、東西5.6mを測る。壁高は深い所で24cmを測るが、覆土と基盤の土質が非常に似かよっていて検出困難なため掘り下げたこともあるので更に深いものと思っている。炉は住居中央より西側奥に構築された石圓炉で、石上面から炉底までは60cmを測る。四隅を夫々一枚の平石を縦に埋め囲ったものであろうが、南と東側の石は取り除かれ、西側の石は約15cmほど中へすべり落ちているが、推定1.4mにも及ぶ大形石圓炉で、石もよく焼け、焼土も厚かった。周溝は南側だけに検出されたが、場所によっては10cmほどの深さがあり、壁沿いに丸平石、角平

3図 白須遺跡遺構全体図(1:600)と1号住居址(1:60)



石の立石が3こ、(S 1, 2, 3)がある。柱穴は8こを数えるが、P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>, P<sub>5</sub>が主柱穴と思われ、土堤北を考えれば8~9こあったと考える。東側壁添いに埋甕2こが並んでいた。土堤造成によって上部が削り取られていたので検出当初見つからなかったが、断面調査で見つかったもので上部半分は不詳であるが共に正位の埋甕である。埋甕1は埋蔵前に底は切り取られ、4この石敷の上に据えられたもので、7図の1~6までの土器片の上に、9の磨石と、土偶の頭頸部(8)が伏せて収納されていた。なお黒曜石片も數片入っていた。床は黄灰色の三紀粘土質のため固くしまっているが、場所によってははり床の所もあった。覆土は赤褐色土であったため、当初は落ち込みを判別するのは困難であったが、黄灰色土の差別は下層ではつき易かった。なお、住居址中央部あたりから東にかけて帶状に4~5mにわたって累石があり、その間に多くの土器片が出土し、土堤壁西側にも累石と暗渠排水溝があって、後世の破壊の多い住居址で、床面又は床に近い所からは、凹石・石器のはかは土器片、黒曜石片の出土に止っている。

## ② 遺 物

### ア. 土 器 (8図, 9図, 10図, 図版3)

埋甕1(8図7)、埋甕2(10)、器台(11)、底部(12~14)、土偶(8)のほかは殆んど破片であった。埋甕1は胴部だけで、縁の薄いハケ目が施されている。1~6の口縁、頸部の土器片の数が多いが、甕内に収納され、その上に9の磨石と、8の土偶が下向きで載せられていた(写3)ことから考えると当初から意図的に収納された様に思い、土偶のあり方に一つの暗示を与える発見と思う。埋甕2は、口縁部、頸部は土堤のために欠損し、中には半分くらい新しい土が落ち込んでいた。胴上部に僅かに、沈線の同心円状文様が見られる。15は器内部に太い隆帯文を持つ中葉の鉢形土器、16~29の多くは各種口縁、唐草文、渦巻文、太い隆帯、沈線文から爪型文の施文が見られる。8図24, 25は蕨手、9図1~11は炉の中の土器、12~16は渦巻文、17~19は唐草文、20~28は刺突文、29~33は磨消繩文と結節繩文、34~41は隆帯の貼付、沈線文と結節繩文、42~10図5までは綾杉文6~15は沈線による横行、縦行、円囲いの施文、17, 18は磨消繩文其の他である。総じて繩文時代中期後葉、諫訪地方でいう曾利Ⅳ、Ⅴに比定される時期で、下伊那地方で最も多く発見される頃のものである。19~26は土壤7から発見された土器である。

### イ. 石 器 (図16, 図版3)

図16の1~4は硬砂岩製の小形打石器で3は土擦れによる磨痕が著しい。5は小形磨石、6は錐石であるが、片面きれいに磨きあげてある。この例は2号住居址にもある。7~8は緑色片岩製の半磨製石器、9~11~12は硬砂岩製で自然面を非常に多く残したもの、10は輝緑凝灰岩製の定角形磨製石器、13は片面擦磨の砥石である。石材の多くは天竜川の転石を利用したものである。図に含めないものを含めて石器の数が多いが、欠損の多いものばかりである。黒曜石片の出土も多い。14~17は凹石と磨石である。凹石3こは単なる自然の丸石を使用しただけでなく、周囲全体又は一方を丁寧に擦り上げて成形してある。とくに14は一面を丸く擦っている所に特長がある。14と15は西・南壁沿い床面に置かれていたものである。

### (3) 2号住居址

#### ① 遺構(4図 図版4)

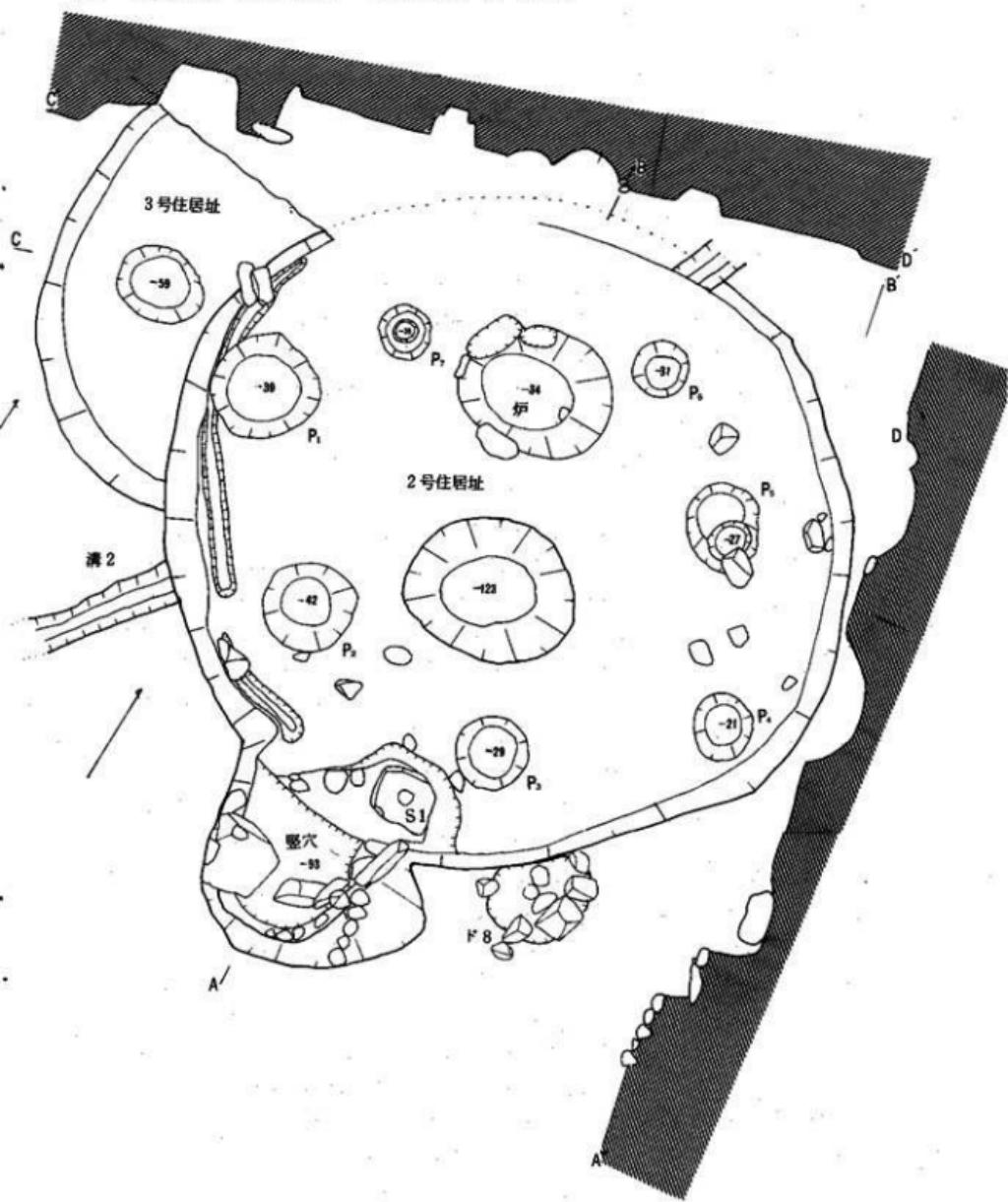
2号住居址は1号住居址の南、5mほどの所、Bの畑の北東端からAの畑の南にかけた所にあり北側の一部は土地造成によって床まで削りとられている。プランは東西、南北共7mほどの円形で、壁高は南側(上方)で90~95cmと非常に深い竪穴住居址、掘り方は垂直に近く急である。炉は中央北側奥にあり、数こ以上の石圓炉であったと思われる。石は平状丸石が1こだけ残り、北側に同様の石の除石跡が2か所あり、周囲を石で囲った石圓炉であろう。炉は浅い摺鉢状に掘り込まれ、炉底は35cmほどで、焼土塊はあるが薄い。周溝は幅広で深いが、西側から南側にかけて検出されただけで東、北にかけては不詳である。床面は西半分は黄灰色の三紀粘土質土で固く平坦であったが、東側半分は疊まじりの土質であり、土壤1の上面からP<sub>3</sub>、P<sub>6</sub>にかけての一帯は、上方一帯から続いている石列の石の落ち込みがあるのか、20~30cmほどの厚さの累石が多く、検出の難しい住居址であった。従って、壁にしても、床にても、柱穴にしても判別し難い状況であった。柱穴は7こを検出しているが、P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>については確としない所がある。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>7</sub>は自信の持てる柱穴で、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>は主柱穴の基範とすることができる。P<sub>7</sub>は、柱穴は二重構造を示している。炉の北側にも柱穴の残存を予想したが、検出はできなかった。深さで言えば穴底が残っていてもよい筈と思ったが、近世の溝2、石列等によって欠損しているようである。中央部には、住居址の床面から測って123cmと深く、長径175cmを測る土壤1がある。覆土上面は黒土で、土壤を中心にして2.5m~3mに及ぶものが40cmほどだったので、そこから測れば160cm以上に及ぶ大きな土壤と言う事ができる。住居址を切って作られた土壤であるが、時期は遺物から見て繩文時代中期後葉に比定される。南側壁外に住居址の張り出し部の様に掘りこまれた竪穴がある。東西1.4m、南北1.8mの範囲で、やく1mの深さを持っている。掘り込みの中には大小の石が充満し、石の間には隙間ではなく黄灰色土と赤褐色土が入り込んでいることから、時期的に見ればそう新しい覆土とは思われない。中間には段状に大石が配されていた。2号住居址の壁が直に切られることなく接点は湾曲していること、底部は床面とほぼ同じか、せいぜい4~5cm低い程度で、その口元には、60×55、厚さ40cmほどの大石(S1)が配置されている。この石の上面には方形状に浅い凹みがつけられていた。この住居址に付属する遺構と考える要素は多いが、黒曜石片1こが出土ただけで、確証する遺物の出土はなかった。

#### ② 遺物

##### ア. 土器(図11, 12, 13 図版5)

住居址の大きさに比べて遺物の出土は少なかった。11図1は器台、2~3は底部である。5~16, 19は、壺形土器、鉢形土器の口縁でキャリバー形もある。文様は太い沈線の唐草文、渦巻文、懸垂文、結節繩文、沈線文が見られ、無文の壺もある。17~32は繩文を地にした懸垂文、結節繩文を配したグループである。図12の土器片は縦の太い沈線といろいろな結節繩文を配したもののが殆んどで、同一個体のものもありそうである。唐草文、渦巻文、刺突文の土器も含まれ、繩文時

4図 2号住居址 (1:600)・3号住居址 (1:600)



代中期後葉の様相を示している。39、40は上層グリット掘りの折出土したものではあるが、時期差はないと思う。13図1～10の土器は土壌1の下層から出土した土器片で1、2、4は、11図11、12の土器と同個体のように思う。構築状況から見ると、土壌の方が2号住居址より新しいが、出土の土器様相から見れば大きな時期差ではなく、縄文時代中期後葉で、共に1号住居址と略同時期に比定されるか、僅かに新しいと思う。

#### イ. 石 器 (図17)

石器も少なめである。17図1、2は硬砂岩製で剥離面の多い打石器で、本遺跡では珍らしく完形又は完形に近い石器、3は緑色片岩製の剥離面の多い打石器である。4、5、8は硬砂岩製、自然面を多く残した打石器、9～12は自然面の多い打製痕の非常に少ない横刃形石器である。6は緑色片岩製の半磨製石斧で横刃形石器を除いては欠損石器が多い。14は三紀の様な粘板岩を加工した軟質の石器で、磨耗が目立つ。15は凹石、16は片面研磨の砥石、13は両面擦磨の錐石で1号住のものと類似している。17、18は小形の磨製石斧で、上層からの出土である。

#### (4) 3号住居址

##### ① 遺 構 (4図 図版5)

2号住居址の西隣りにあり、2号住居址に切られている。北も土壌でけずられ、約4分の1しか残っていない。プランは円形であることの他は不詳である。壁高も30～40cmあって緩やかな掘り方で、1号住居址に類似する。覆土は黄褐色土で、床は灰黄色の粘土質土のため固くて良好、柱穴の残りは1こだけだが、大きく深い。ほんの一部しか残されていない住居址のため確たることは言い得ないが、1号住居址と類似する要素はある。

##### ② 遺 物 (15図)

出土遺物は少なく、縄文時代土器片数と黒曜石片だけである。15図19～22は縄文時代中期後葉の土器片で、1号住居址と同時期とも思える。

#### (5) 4号住居址

##### ① 遺 構 (5図 図版6、7)

4号住居址は、Cの烟の北東先端部にあって、土堤によって北半分は削り取られている。プランは約6mほどに及ぶ多角的方形状である。南北の長さも土堤で切られているためはっきりしないが、P<sub>6</sub>の位置から推定すると6m余もあるろうかと思われる所以大形な住居址と言ふ事ができる。炉は中央や南奥にあると見たい。P<sub>3</sub>～P<sub>5</sub>の外側は5号住居址と、石列2の累石が重複していてはっきりしない。壁の掘り込みは現状でいうと15～20cmと浅めであるが、Cの烟の表土は削り取られていること、覆土は黄灰色、基盤は灰白色土で検出困難なため削りが深かった様にも思う。床面の決め手を見つけること困難、遺物も少なめで、削るうちに炉石が浮上する状態であった。炉は方形又は長方形の石圓炉である。炉石は細長い一枚石で、西、東は1こか2こかはっきりしない。東側の石は2本に折れ、その一つが炉の外に転がっていた。北側の石は取り除かれている。表土

が浅かったためか、取り除かれ、北側の土堤に炉石が散乱していた。石は焼け影響は強いが、炉内には炭や焼土は非常に少なく、炉底に僅かに見られた。炉は深いのに、火の使い方に疑問の残る炉であった。周溝は広い所で18cm、深さは12~20cmくらいあり雄大なものである。柱穴は6こが確認されている。夫々が主柱穴かと思うが、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>は大きく深い。とくにP<sub>3</sub>は、土堤下にありながら深さ53cmもあることから、床面からは80cm以上あったと考えられる。これだけの深さがあれば土堤下から1、2この柱穴が見つかってもよいと思うのだが、その残跡さえなかったので、P<sub>3</sub>を柱穴とするかどうか疑問は残る。床面も北側は黄灰色、東側は赤褐色混じりで炭の散乱も多かった。炉の北側、炭層のあたりから土器No 1、2が出土している。この土器は完形ではないが、13図の12~16がNo 1であり、17~19がNo 2、11がNo 3である。炉の東あたりから小さめのピットが検出されているが本址のものか、5号住居址のものかはっきりしない。

### ② 遺物

#### ア. 土器(13図 図版7)

13図11はP<sub>3</sub>の北側にあったNo 3の土器で、無文の粗製土器、胴部が一部あるだけで、口縁底部を欠損している。近くではあるが2か所から出土している。12~16は土堤際にあったNo 1の土器で、口縁は厚手で縄文帯を持ち、太い沈線で区画するタイプである。17~19は西側にあったもので、文様タイプはNo 1と同様、胴部に近い辺り同心円状の沈線凸画を施し、夫々の区画内に縄文が施文されているもので、No 1と同一個体と思われる。20、21は無文の鉢形土器の口縁、22はNo 1、2と同様の土器片で、夫々厚手の土器である。炉底から無文の土器片數片が出土している。土器形式は縄文時代後期前葉の土器と思う。

#### イ. 石器(図17 図版7)

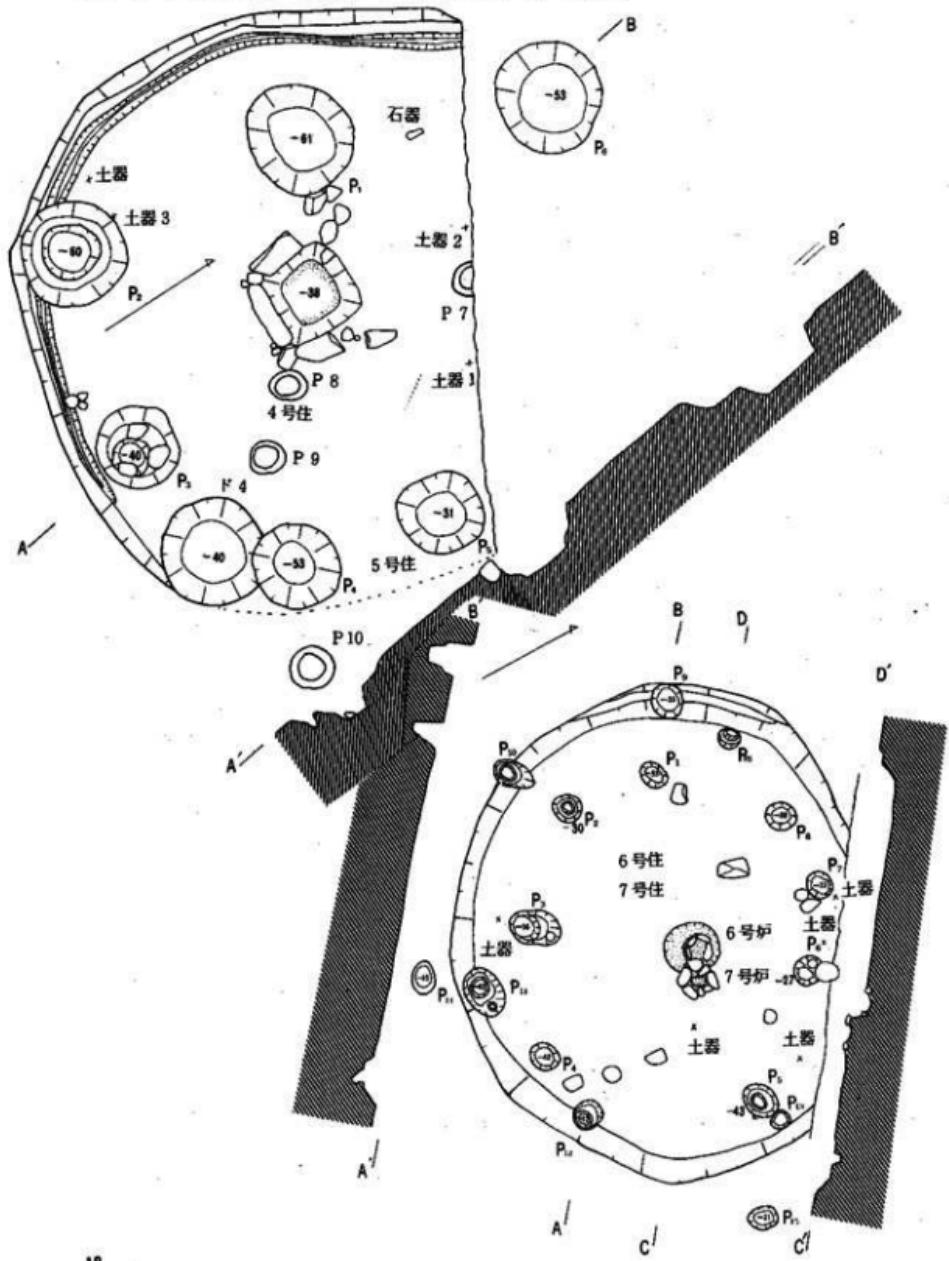
19、20は硬砂岩製横刃形石器で自然面を多く残した剥片石器である。25は硬砂岩製大形、粗製の打石器、21は灰白色珪岩製の石槍形石器、22は小形の定角形磨製石斧で仕上げは非常に丁寧である。23は赤色珪岩製の石匙、24は珪岩製の異形石器でこの他に、打石器片、黒曜石片も出土している。

### (6) 5号住居址

#### ① 遺構(5図 図版8)

5号住居址は4号住居址の東側にあり、4号住居址に切られていると思う。しかし、遺構と思われるものは、4号住居址の炉から東側にかけて存在した小形の柱穴状ピットP<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>とその東のP<sub>10</sub>だけであって、住居址を物語る掘り込みもなく、床の確認も、石列2の累石が4号住居址の東側にかけて存在したため破壊が著しかったと考えている。炉もないし、掘り込みもないでの住居址とすることは不適当かとも思うが、径3mほどの範囲にわたって縄文時代中期後葉の土器片が多くあった。

5図 4・5号住居址(1:600)、6・7号住居址(1:600)



## ② 遺物 (14図 18図 図版8)

### ア. 遺物

1~8が5号住居址の土器である。陸帯で構成したり、渦巻文、刺突文で文様構成をする大形變形土器の破片で縄文時代中期後葉加曾利E式土器である。

### イ. 石器

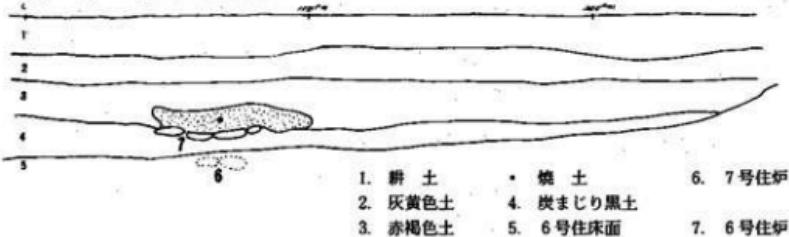
図18の1~3は硬砂岩製自然面を多く残した石器である。

## (7) 6・7号住居址

### ① 遺構 (5図 図版9)

6・7号住居址は、Dの畝の東北端に重複してあった住居址で、プランは殆んどずれがなく西北にわずかの段差があって上面の床が一部残り、ほぼ中央に小形の石圓炉が30cmほどのずれを持って構築され、古い炉の上に新しい炉が作られた住居址である。柱穴の数も16こ以上と多く、改築を物語っている。従って新しい炉(上面)を持った住居址を7号住居址とし、下層の炉を持つ住居址を、6号住居址と呼称した。6号住居址が火災に合ったものと思われ、炉の周辺は勿論のこと、住居址全域にかけて、厚い所で12cm、薄い所で6cmほどの炭まじり黒褐色砂土の堆積があり、遺物の出土の多い層は3と4で大部分は4である。従って7号住居址に伴う遺構は上面の炉と柱穴の一部と考えられるので、説明は主として6号住居址に限られる。

6図 6, 7号住居址土層断面



7号住居址の床と考えられる所は北西部の壁際と、P<sub>4</sub>の周辺に一部認められただけで、遺物も器形を知る土器は見つかっていない。従ってここでの説明を殆んど6号住居址を中心にせざるを得ない。7号住居址のプランは確としないが、5図のプランとすれば、長径4.9m、短径約4.2mの階円状の堅穴住居址で、炉は中央や、南東側に構築され、大小7つの平状石によって円形状に組まれた小形の石圓炉で、石の中は浅いU字状の火床となっていた。柱穴についても、以前の柱穴を使用したものか、別に構築したものか判別できなかったが、住居址を一部拡張して、壁際を取り巻くP<sub>9</sub>~P<sub>13</sub>は7号住居址のものと思われる。

6号住居址は、下層にあった古い住居址で、その後の拡張があったとすれば、4m~4.5m以下の階円形の住居址であったと考えられる。炉はほぼ中央に構築され、床より8cmほど掘り下げ、5こほどの縫長石を埋め込んだ石圓炉で小形のものであった。柱穴は少なくとも8こがあったと

思われ、P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>と想定している。場合によっては、壁際に補助支柱穴があったのかもしれない。床面は小石混じりの砂質土で、この住居は火災に合っているため炭はじりの黒褐色土の堆積があり、この中から多くの遺物が出土している。

## ② 遺 物

### ア. 土 器 (14, 15図 図版10)

6・7号住居址の夫々の区別ははっきりしないので6号住居址として扱っている。完型品は図13の1の甕と破損が極めて多く水洗をしないで保存してある小形甕(写10の1)で共に、北側土堤際にから出土している。1の甕は粘土縫によって口唇部に網状に張りつけ、そこから胴部にかけて縦に施したもので、胴部のくびれは無文帯、その下部に小さめの櫛形文のつくタイプで薄手の土器でキャリバー形で胴部で一度くびれ底部に続く深鉢形土器である。10は無文の鉢形土器、11, 12は底部で緩やかな丸みを持って立ち上る形式は他の住居址のものと異なる。13～18は櫛形と隆帯に刺突文を施すもので、1の土器にくらべ櫛形文は大きく深い。19, 21は鉢形土器図14の1～3は櫛形文、7～13は隆帯の構成、14, 18は竹管文施文土器である。器形を示す土器は少ないが、総じてこれらの土器は縄文時代中期中葉、農耕地方でいえば井戸戸式か、その後に比定される時期と考えられ、本遺跡の中では最も古い時期の住居址である。住居の重複、炉の形態から考えて、6・7号住居址には長い時期差はないものと思われる。

### イ. 石 器 (18図 図版10)

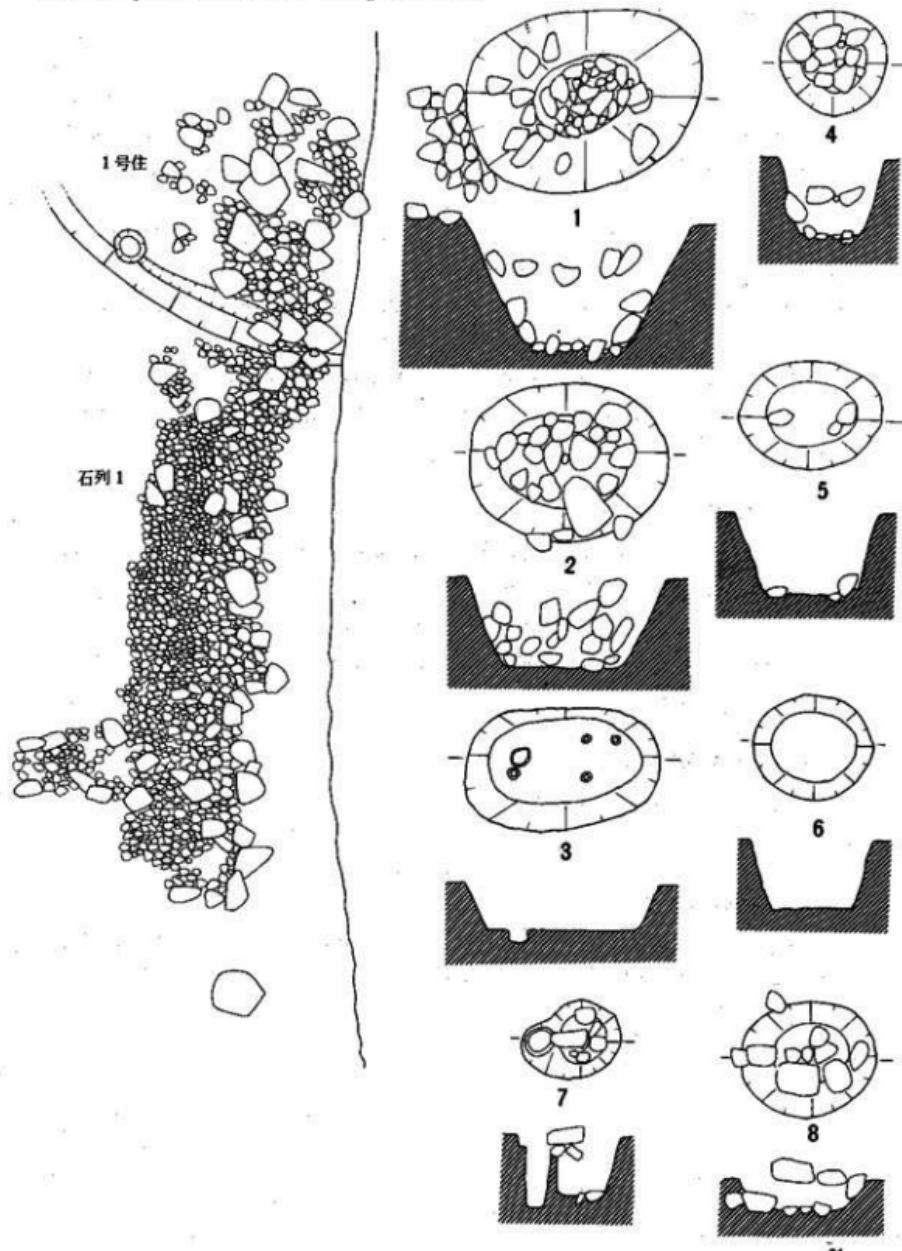
4は硬砂岩製打石器で土づれが多い。5は硬砂岩製、自然面を多く残した横刃形打石器、6, 7はチャート製石匙類似の横刃形石器、8は輝緑凝灰岩の半磨製石器の刃部、9は黒曜石の石鏃、10は黒曜石の異形石器、11は凝灰質の石匙、12は輝緑凝灰岩の半磨製石器の基部、13は小形の擦り石で、いずれも天竜川の転石の利用が考えられる。

### (8) 縄文時代の土壤 (2図, 7図 図版11, 12)

全地域で8基検出されている。そのうち縄文時代と比定できるものはド1, ド2, ド4, ド7, ド8の5基、ド3, ド5, ド6は時期不詳である。

土壤1は2号住居址で触れたように大きくて深い。土壤としては雄大なものである。土壤2は2号住居址の東側に広めで、石の詰りの多い土壤で、縄文時代中期の土器片が数片出土している。土壤4は5号住居址の中にあって、掘りの深い土壤であった。黒曜石片と土器片10片ほど出土している。土壤7は1号住居址内東側にあって小振りだが掘りは深く整っていた。柱穴際に掘り込まれているが、住居址との時期差ははっきりしない。10図19～26がその出土土器で縄文時代中期後葉と後期類似の土器片がある。黒曜石片が20点ほど出ている。土壤8は2号住居址の東壁上にあり、縄文時代土器片が2片出土している。土壤3, 5, 6も2号住居址の周囲にあって夫々形態は違うが、石が入っていない掘り込みだけのものである。

7図 石列1(1:600)、土塁 1~8(1:600)



#### (9) 石列 1, 2, 3 (3図, 7図 図版13)

本遺跡の東側は白須台地の東端でもあり、台地端には土留様の石積が多く、特にCからAの畠の東端に南北方向に多い。その累石を取り除くと、南北に続く幅1.5m～2mほどの石が帶状に続き、2号住居址の東端まで続いていた。Cの畠のものから石間から近世陶器片2点が出土したほかは、下方で縄文時代中期の土器片の出土は見たが時期は不詳である。

1号住居址の中央付近からAの端の北側、土堤に近い所に東西に続く累石があった。1号住居址の覆土からその上面にかけては不規則に積み重っていたが、1号住居址の東側から東にかけては、上部に余り石がなく、表土下30cmほどに幅1.5m～2m、長さ3.5mに亘って敷石状の石が並んでいる。石は拳大から人頭大以上に亘る石の配列で、石間又は石の上面から近世陶器片20点ほどが出土し、東の方で1か所直交する部分があった。建物址とも考えられないが、そうかといって自然とも思えない。この石列から南東、土壤5のあたりにかけて近世陶器片の出土が多かった。(18図)その近くには金山社が祀られている。伝承等もないが、近世の建物でもあったのではないかと思う。

#### (10) 溝状造構 1, 2 (3図 図版12)

6号住居址の西にあったのが溝1、2号住居址の上面を西南から北東に横切るものと溝状造構2としている。溝1の覆土は黒褐色土、溝2の覆土は赤褐色土で余り古いものではないと思っている。溝1には中間に流れ込んだ石の並びがあったが(写12の4)それを取り除くとV字状の深いものになり、縄文時代中期中葉と後期の土器片が出土しているが、後世の流れ込みであろう。溝2からは遺物の発見はなかった。

#### (11) 暗渠排水溝跡 (3図)

1号住居址の西側、北東から西南方向に向って2条の暗渠排水溝があった。近世の所産と思われる。

#### (12) 其の他の遺物 (図版13)

数的には僅か2片であるがDの畠の上層から平安灰釉陶器片が出土されている。又、Aの畠の東側から石列1にかけて近世陶器片の出土が多かった。

## IV 調査のまとめ

白須遺跡の調査結果にあるように、縄文時代中・後期の住居址が7軒検出された事は阿南町にとっては貴重な発見である。飯田・下伊那地方にとっては考古学研究上天竜岐以南未開の地と言っても過言ではない。分布的基礎調査さえ十分実施されておらず、発掘調査も少ない阿南地方の事だから当然の事ながら集落として住居址が調査された最初であるからである。下条、阿南町富草、大下条地区の中で、今まで縄文時代の住居址が発見されたのは、親田長原遺跡で1、大下条早稻田遺跡で1、大下条和知野遺跡で2軒だけだから「白須遺跡」調査の意義は大きい。先の遺跡は旧来からの周知の遺跡で、しかも遺跡規模の大きな所である。ところが、白須遺跡は小台地上の小規模遺跡、しかも、今回の現地表探査で土器片の発見を見た新遺跡で、精々1軒か2軒の住居址があればと思って発掘調査に当った所、多くの住居址の検出となつた。結果的には下述のように、一時期1軒、多くても2、3軒の小集落という事になるが、少なくとも3時期、場合によつては4・5時期に跨る縄文時代の中・後期の複合遺跡であった。即ち、縄文時代中期中葉住居址2軒(6、7号住居址)縄文時代中葉後葉住居址4軒(1、2、3、5号住居址)、縄文時代後葉前葉住居址1軒で、大きく見れば3時期である。ところが6、7号住居址は、火災後の拡張重複と見て1時期、2・3号住居址は切り合いで2時期となるので、4時期或いは5時期と言う事になる。白須遺跡の台地はそう広くなく、上・中央部は道路用地外に造構(縄文)は予期されない。あるとすれば下方(Aの畑より下の水田)と考えられるから、何時期かにわたる縄文時代の小集落が複合していたことになる。住居址別に年代順にあげて見ると、6号住居址が最も古く、次が7号住居址で、三番目が1・3・5号住居址で、これに2号住居址が続き、最も新しいのが4号住居址である。1・3・5号住居址を同一期の住居址とし、Aの下方の水田に住居址があったとするならば4~5軒の集落が成立し、中規模集落という事も可能である。

台地内の立地を見た時に、1号住居址を除いてどの住居址も東端に近い位置に構築されている。この台地は北走の尾根状台地であつて、東南面は日当たりよく井戸入沢を望む眺望に恵まれ、西側により高い尾根を背にすれば、風当りも少なく生活条件は良好、しかも西側に凹地を有し、湧水があるとなれば最適な場所である。複合集落の成立する条件は揃っている。このことを考えるA畑の水田東側に住居址があつてもよいと考えたくなる。

個々の住居址について特長に触れて見ると、6・7号住居址の火災後の重複改築例も興味深く、共に炉の規模が小さいのも特長の一つである。数少ない櫛刃文を持つ住居址の発見であったと言える。

1号住居址の炉は雄大で夫々一枚石によって四面する石囲炉はこの時期をよく象徴している。壁沿いの立石状の石3か所と、土偶と擦り石を収納した埋甕に特長がある。土偶と擦り石の共納、ばかりでなく、土堤の造成によって口、頸部が落ちこんだものでなく、甕の底部を削り取り、基

盤に数この石を並べ、その上に甕を置き、その中に口縁部を含めた土器を入れ、擦石と並べて土偶の頭部が伏せてあったもので、土偶と埋甕の結びつく稀有な例として注目したい。土偶も頭部だけであるが、仮面被りの逆三角形顔面突出の土偶、顔容、頭部髪形貼付も巧みなもので、飯伊地方の土偶中の逸品である。

大きくて深い2号住居址も雄大、それに反して出土遺物は少なく、炉石は大部分欠損という結果であった。1号住居内の土壙7と同様、住居址内に構築された深くて大きい土壙1等による土壙のあり方に課題を投げかけている。住居址の附属か、後世の単独遺構かと迷う豊穴のあり方にも注目したい。

4号住居址は、数少ない縄文時代後期前葉の住居址として貴重である。全容が見られないのは残念であるが、大形多角形の方形状プラン、深い周溝、大きな石圓炉、土壙とも思える掘り方の大きい柱穴群、旧来の常識だけでは検出を誤りそうな後期の住居址であった。縄文時代後期住居址の本来の在り方の基範となるのか、特異なものとなるのか、今後の調査例に俟つかない。

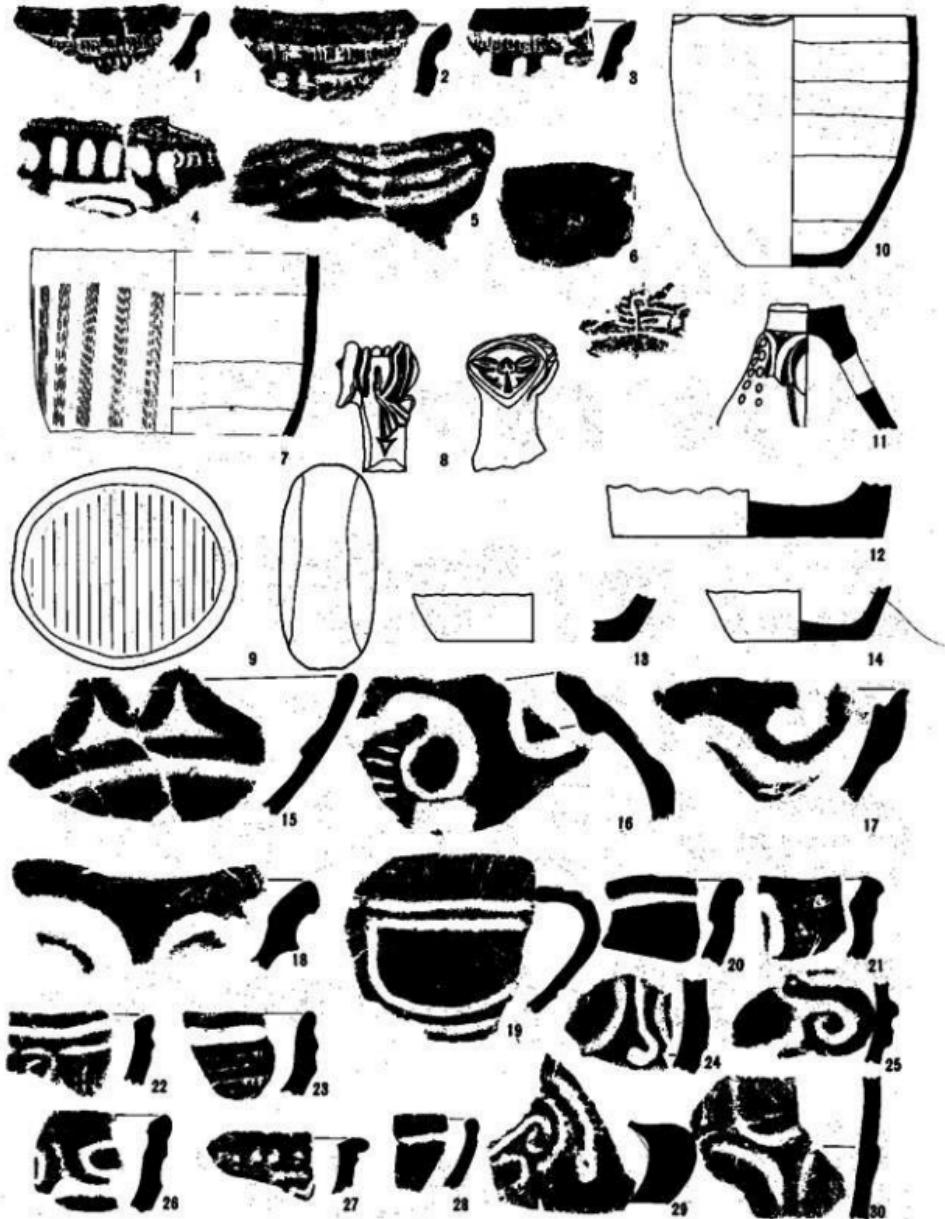
これは偶然なことであるが、時期は異なるが夫々の住居址の場所がほぼ等間隔に位置している。後世の土地造成の切り取りが3・4mずつ上方へずれていれば、殆んど全部の住居址が埋滅していくであろう事を思うと、土堤で一部が切り取られていたものの不幸中の幸であつたといえよう。

住居址と土壙のあり方についても詳細究明の必要性は感じながら、調査員不足と住居址への検出に追われていたのが現実で、手が十分入っていなかった事は事実である。2号住居址の周辺に多く固っていることに注目したい。

遺物について見ると住居址の軒数、夫々の規模に比べて土器にしても、石器にても完形品が少ない。強いて言えば6号住居址に普通程度にあっただけである。石器について言えば、石鏃が少ないと、打石器は加工面の少ない横刃形石器と凹石を除いては殆んど破損品であった。このことは地域的な特長とは思えないで、炉石の欠陥と合わせて見て移住説を考えて見るのが妥当と思っている。

移住先がどこであるかは知る由もないが、富草の遺跡の概要で触れた様に富草地区の遺跡調査の遅れもあって、白須遺跡のように周知されない遺跡が地区内には予想以上に多いのではないかと思われる。その意味からしても、より詳細な分布調査が必要である。大下条地区の分布調査によって10数遺跡の新発見遺跡があったこと、平安時代・中世遺物の出土地が今まで余り登録されていなかった事等が指摘されている。やがて行われるであろう富草宮の原遺跡、大下条早船田遺跡ハネ、久保畠地籍の発掘調査は勿論のこと、例え小台地であっても、国道151号線の改修工事中に新発見の遺跡が見つかることもあり得るので、十分注意していきたいこと正在思っている。

8図 第1号住居址出土土器 (1:3 7・10……1:6)



9 図 第1号住居址出土土器 (1 : 3)



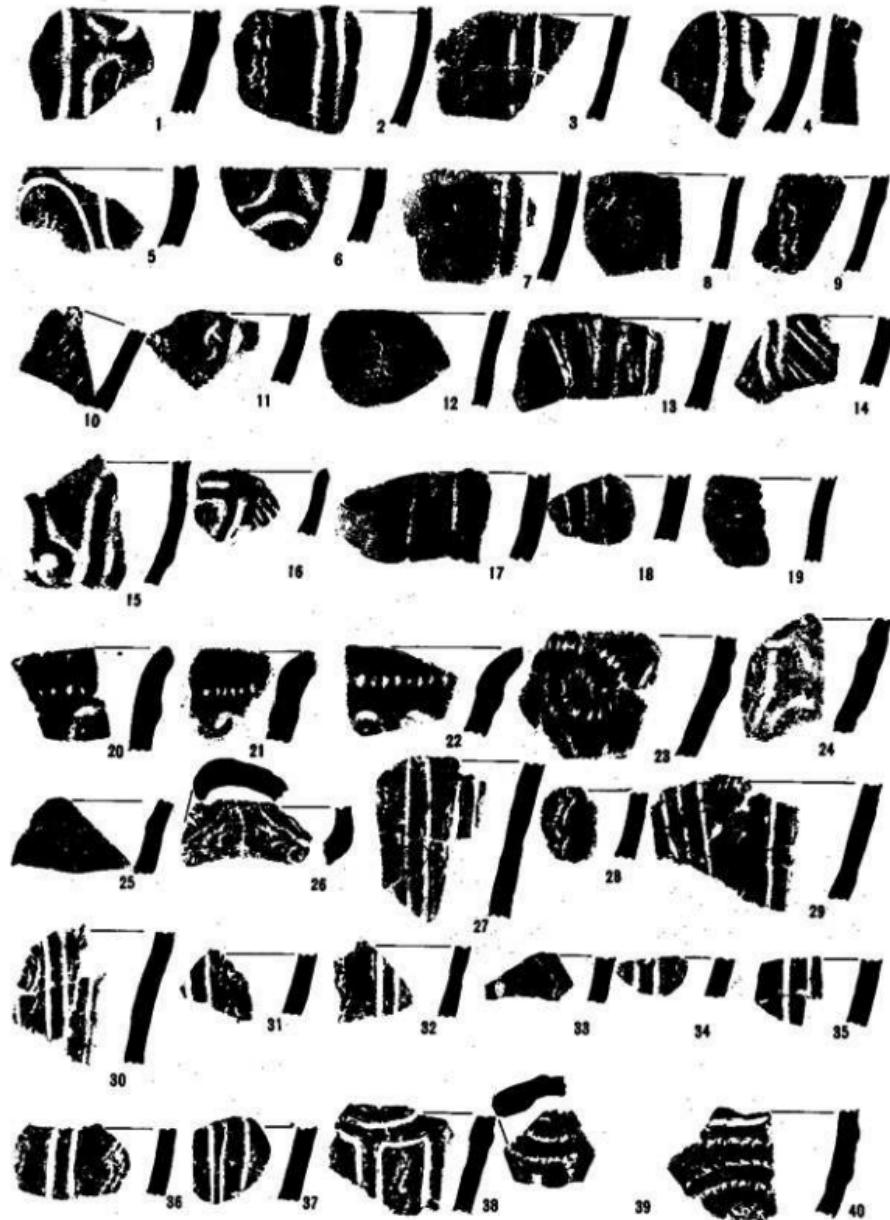
10図 第1号住居址、7号土坑出土土器 (1:3)



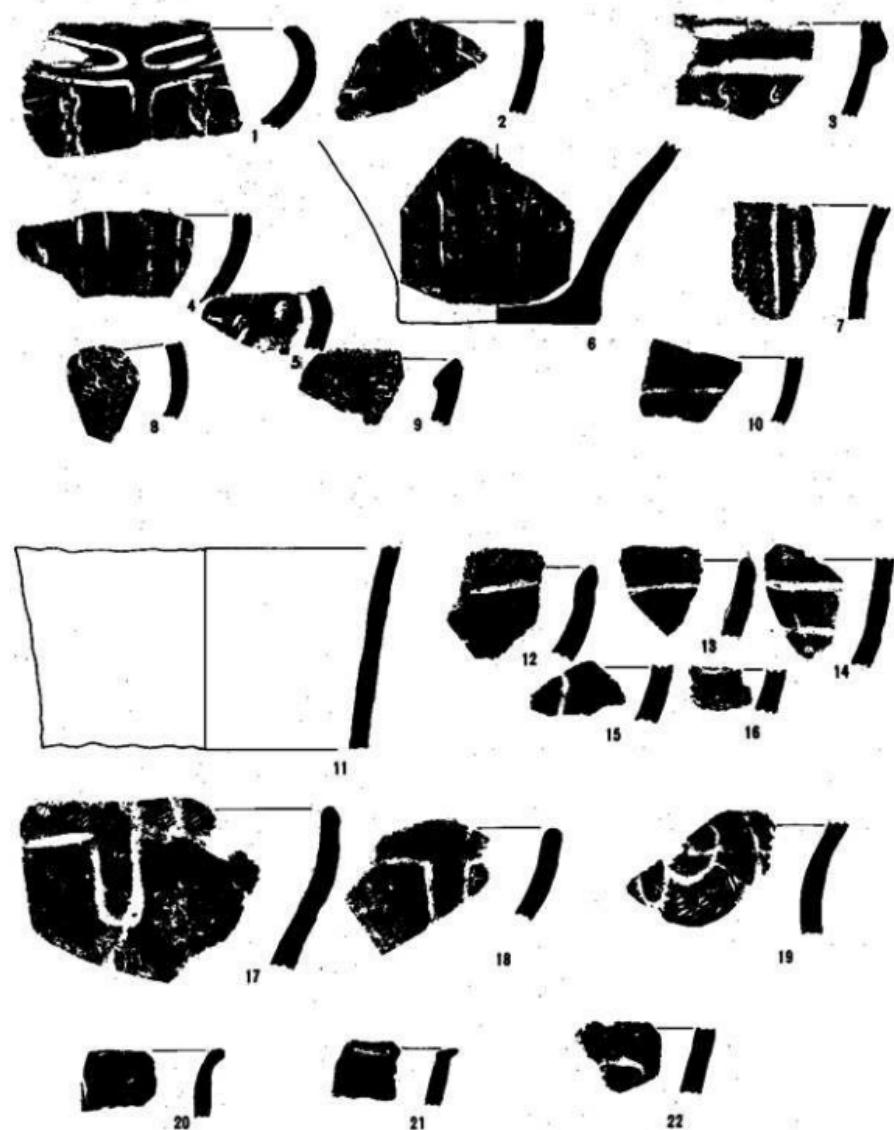
11図 第2号住居址出土土器 (1:3)



12図 第2号住居址出土土器 (1:3)



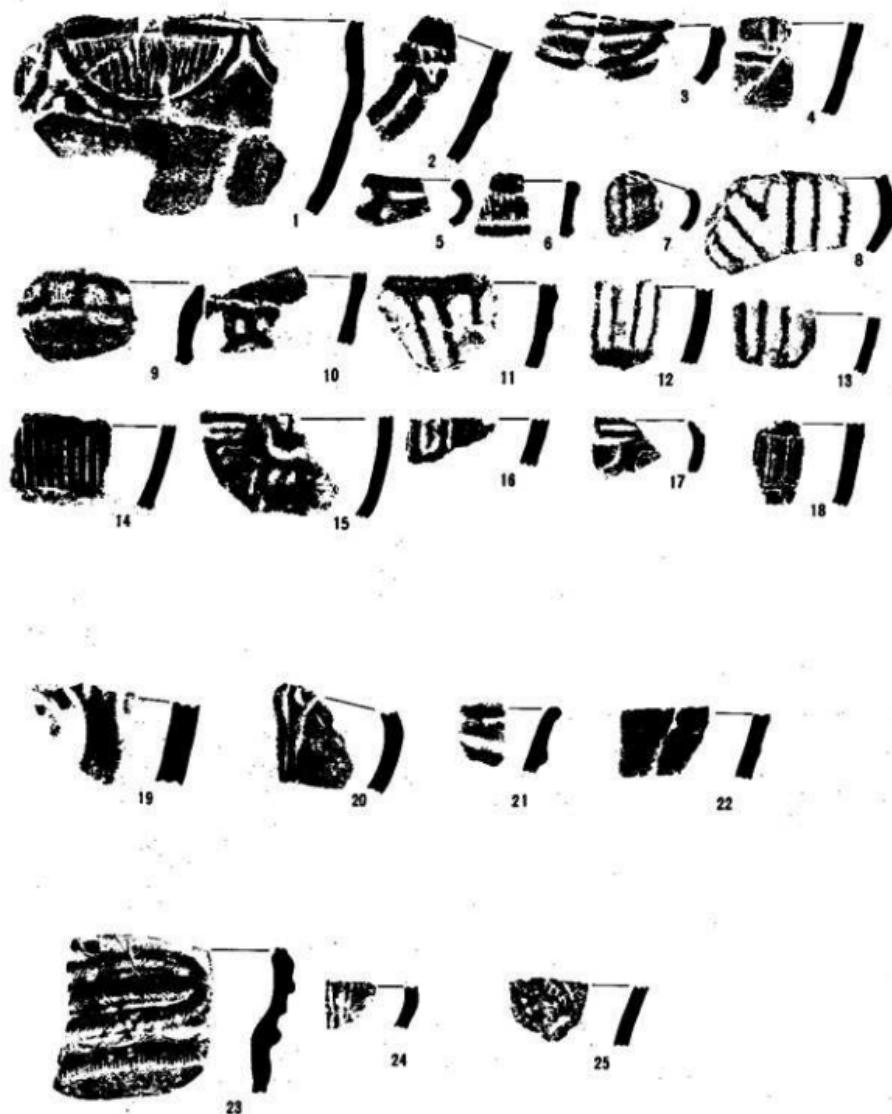
~13图 第2号住居址、1号土坛、4号住居址出土土器 (1:3)



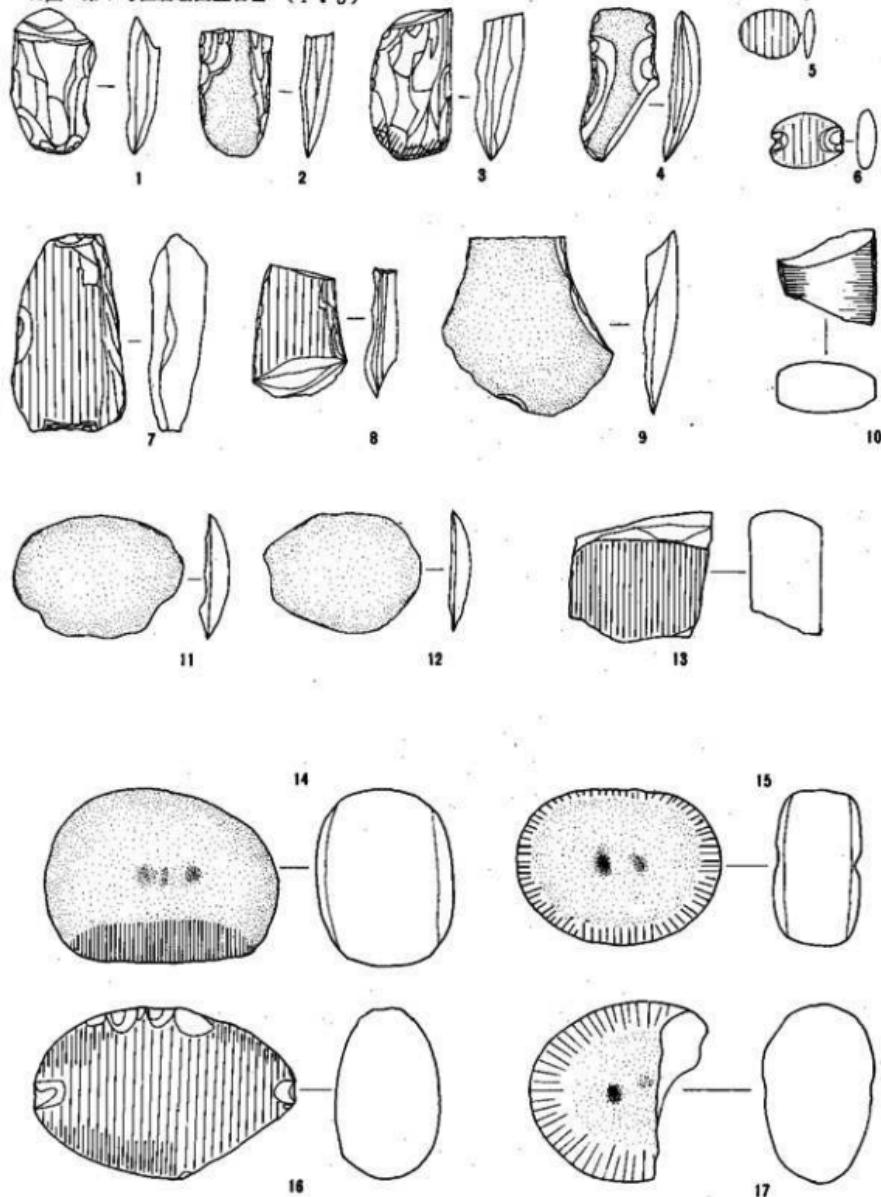
14図 第5・6号住居址出土土器 (1:3・9……1:6)



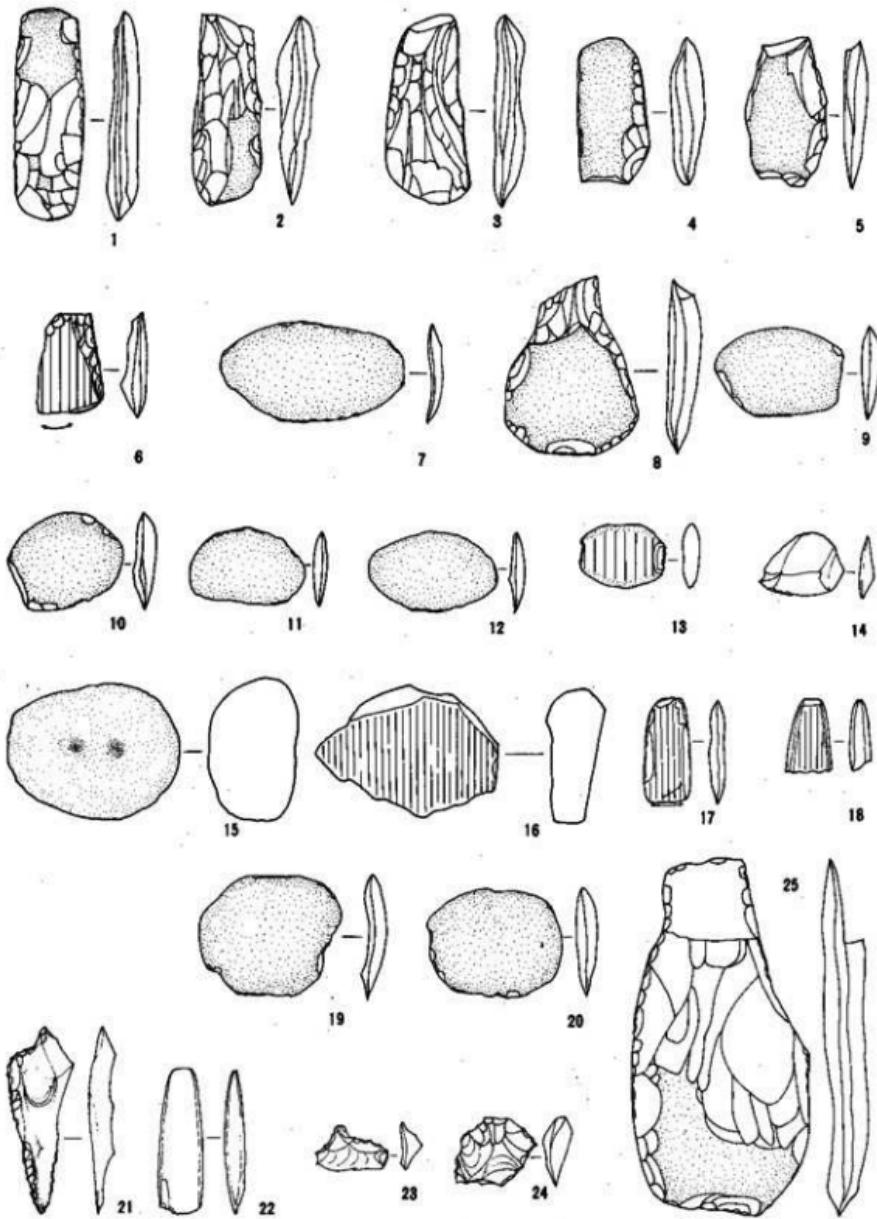
15图 第6·3号住居址、滑状遗物出土土器 (1:3)



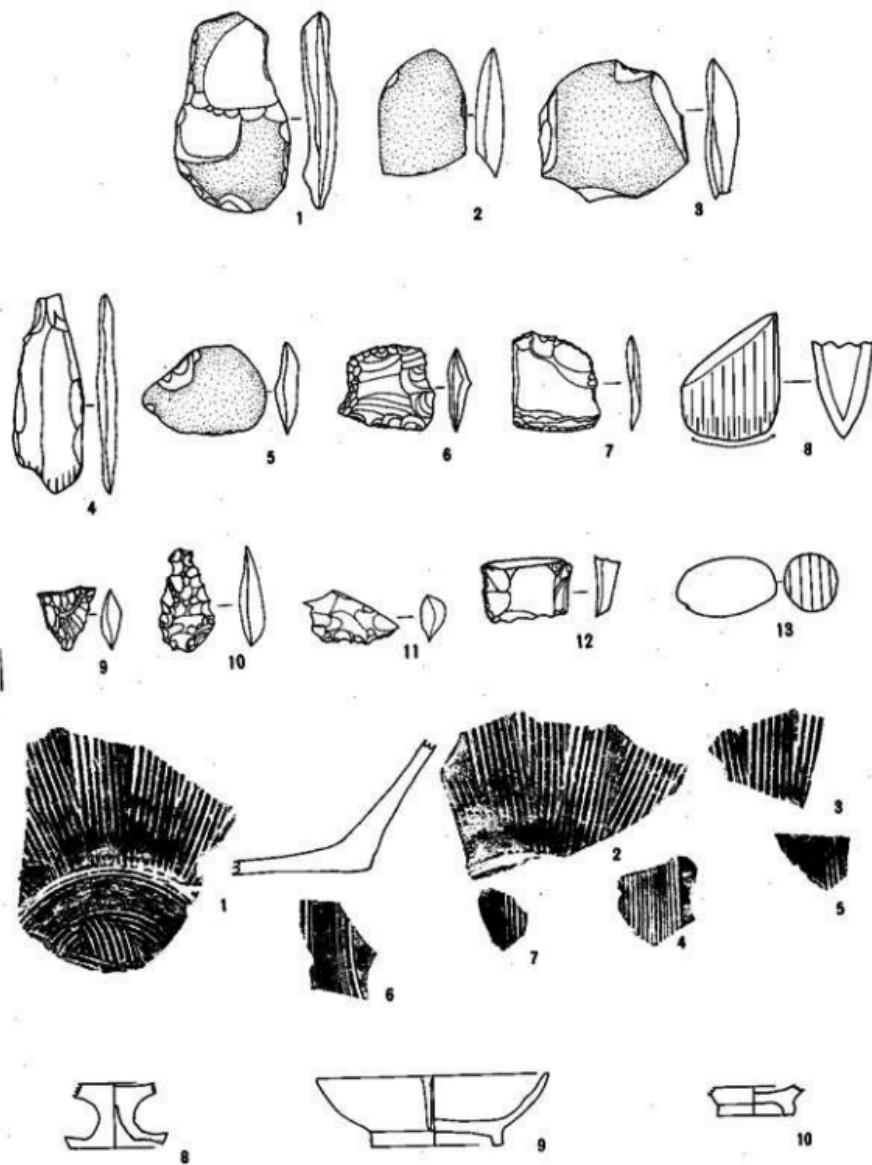
16図 第1号住居址出土石器 (1 : 3)



17图 第2~4号住居出土石器 (1:3)



18図 第5・6号住居址出土石器、石列1の近世陶器





図版1. 白須遺跡遠景

西から



観音堂から



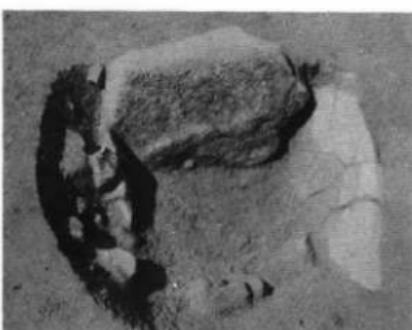
西南上方から



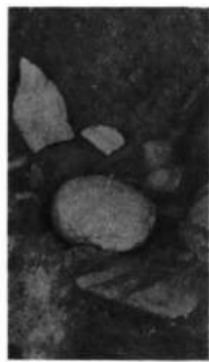
図版2 第1号住居址



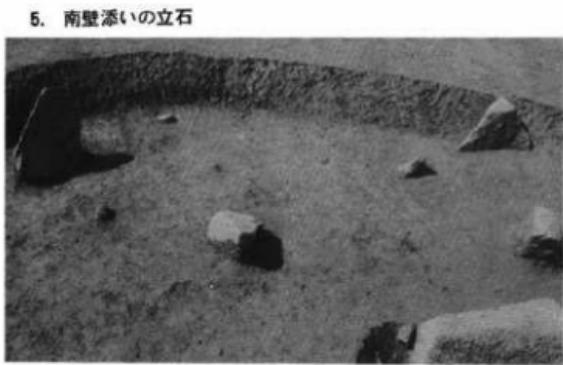
2. 埋甕、土埴 立石



3. 石 囲 炉

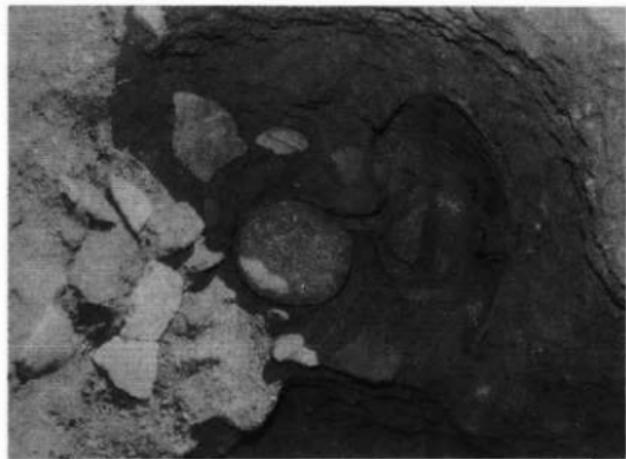


4.  
土偶  
掠石出土状況

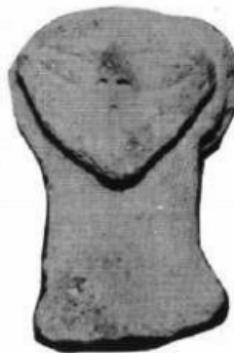


5. 南壁添いの立石

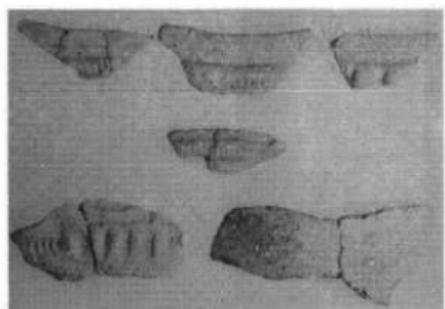
図版3 1号住居址 埋甕、遺物



1. 埋甕 1 出土状況



2. 土偶



4. 埋甕 1 の口縁



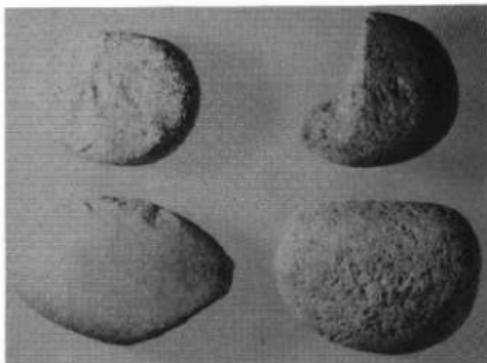
3. 擦石



5. 器台



6. 埋甕 2



7. 凹石

図版4. 2号住居址全景



1. 北から（中央土盛1と炉）

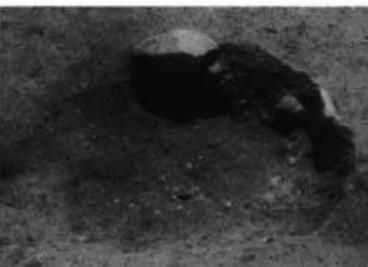


2. 南から（手前竪穴）

図版5. 2号住居址、3号住居址



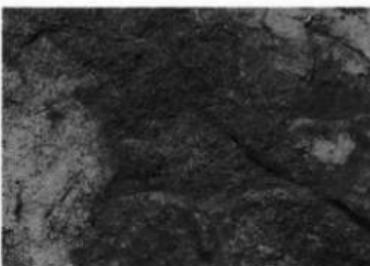
1. 穴



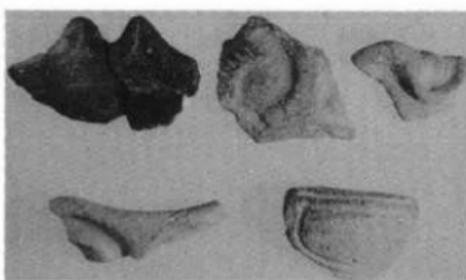
2. 炉 址



3. 土 塚



4. 穴前石



5. 2号住居址出土土器



6. 3号住居址

図版 6. 4号住居址全景

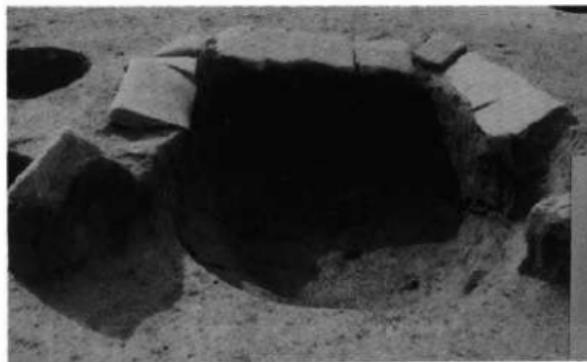


1. 北から（上段 6.7号住）

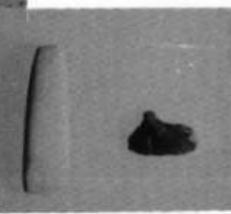


2. 南から（下は 2.1号住）

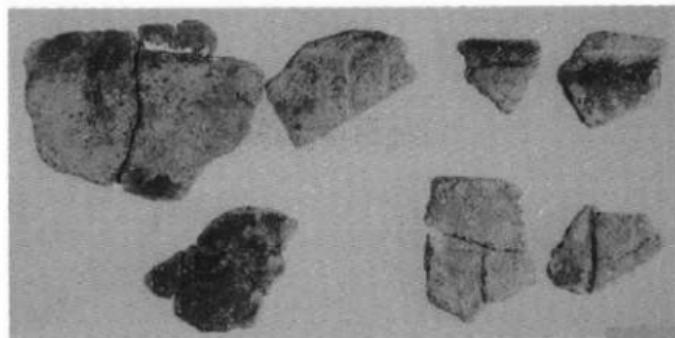
図版 7. 4号住居址 炉と遺物



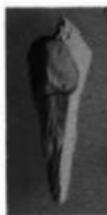
1. 炉



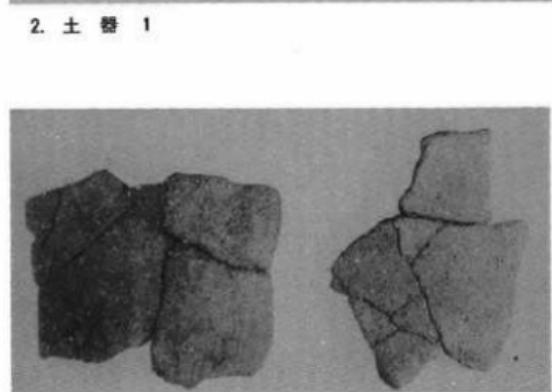
4. 石器



2. 土器 1



5. 石器



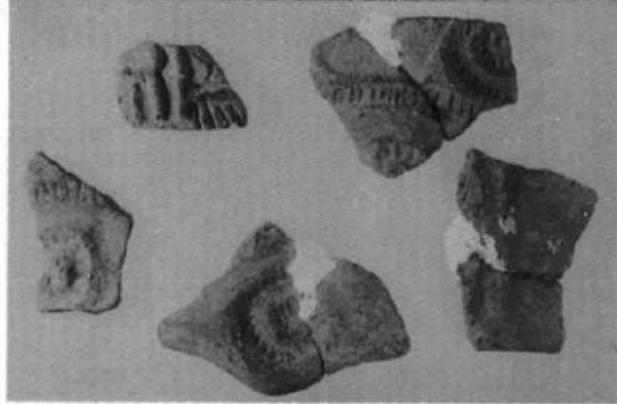
3. 土器 2



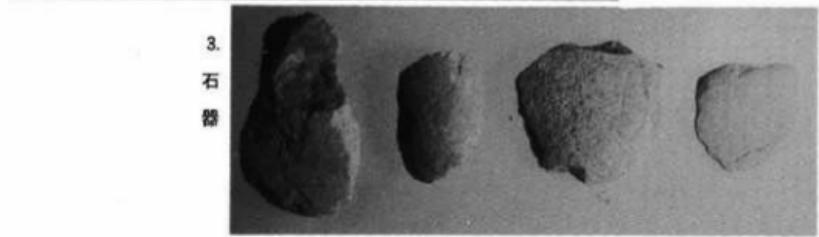
図版8. 5号住居址



1. 住居址と  
土塙

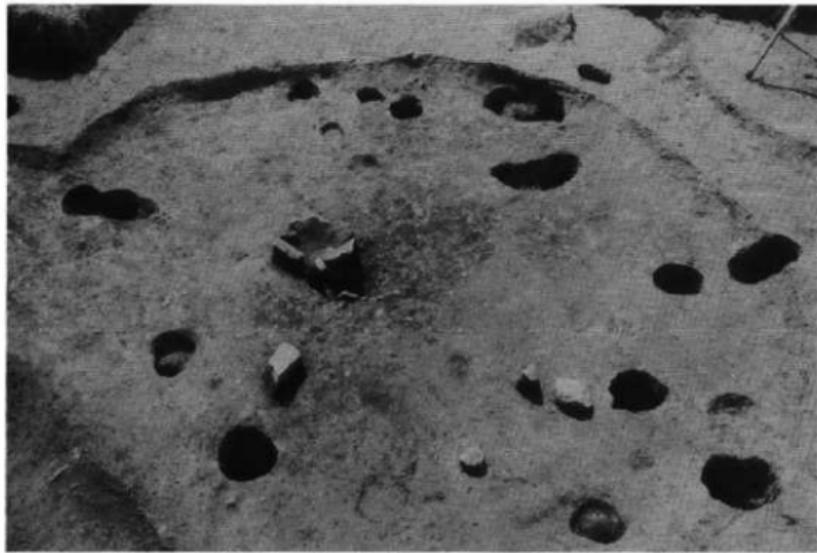


2.  
土  
器



3.  
石  
器

図版9 6.7号住居址全景と石圓炉



1. 6.7号住居址の全景



2.

石圓炉の重複と炭・焼土



図版10. 6号住居址 出土遺物

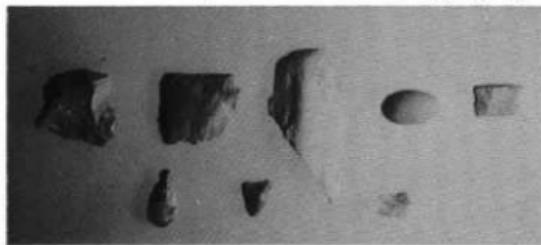


1. 变形土器と出土状況



2. 土 器

3. 石 器



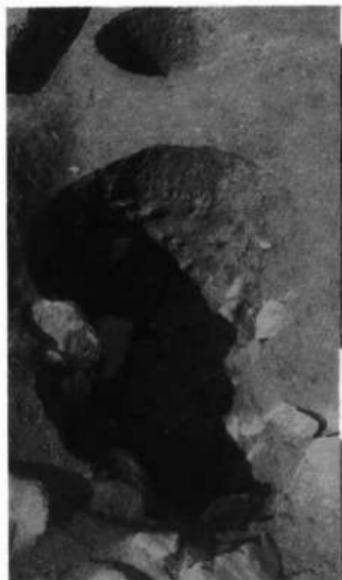
図版11. 土壌 - 1 ~ 4



1. 土 壤 1



2. 土 壤 1



3. 土 壤 4



4. 土 壤 2



5. 土 壤 5

図版12 土壌5～8 溝状遺構



1. 土 壴 7



4.  
溝状遺構

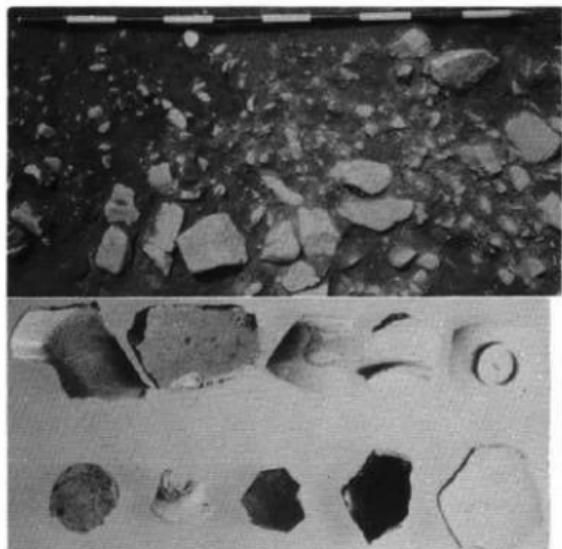


2. 土 壴 5

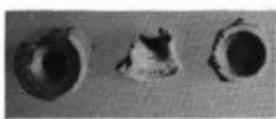


3. 土 壴 8

図版13. 石列 1. 2. 3.と出土陶器



1. 石列 1 と出土陶器



2. 石列 2



3. 石列 3



図版14. 1号住居址石壠炉の復原



1. 検出開始



2. 検出終了



3. 西側の石はずれていた



4. 復原作業の人々



5. 石の復原

図版15. 調査団と作業風景



1. 全員



作業風景



2. 地鎮祭



門原白須遺跡

---

昭和60年3月

発行 長野県飯田建設事務所  
長野県下伊那郡阿南町教育委員会  
印刷 新葉社  
飯田市常盤町飯田商工会館内

